

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和五年十一月三十日印刷(毎月一日)
昭和五年十二月一日發行(回發行)

大星
由良
の脚



類編世綉

大正十三年三月

眞類編特輯

天下の銘酒

シラユキ

白雪

恋よ灯影よ

道頓堀に

君と酌まし

白雪を



摂津・伊丹・灘

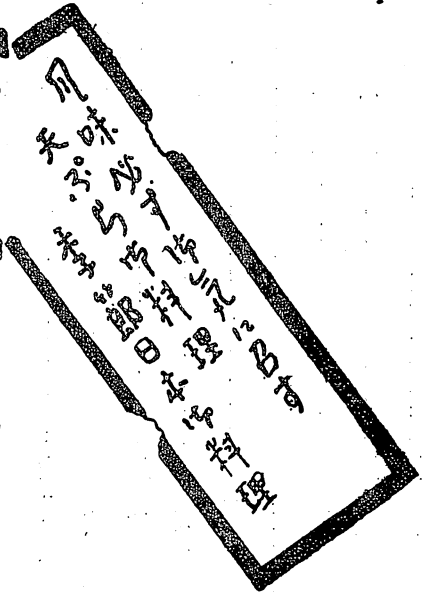
小西本店

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では非御會食を



吉屋會食堂



道頓堀戎げし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋



道頓堀 昭和五年顔見世號

第五十一輯

◇表紙……………(大石内藏之助錦繪)

◇南座吉例顔見世◇葦盤太平記山科閑居・大石内藏之助鷹治郎◇大阪松竹白井社長・大坂松竹白井專務・東京松竹大谷社長・招看板に飾られた南座◇葦盤太平記・大石内藏之助鷹治郎下男岡平幸四郎・大石主税長三郎・母およし梅幸◇時雨炬燵・女房おさん梅幸・紙屋治兵衛鷹治郎・丁稚三五郎扇雀◇鷺娘梅幸◇辰鴛・與四郎長三郎◇春日局・稻葉佐渡壽三郎◇お福の方福助◇土蜘蛛・智壽梅幸◇お國と五平・若黨五平壽三郎◇名和長年・六條少將鷹治郎◇堯心勘彌・名和長年幸四郎◇辨慶中車◇土蜘蛛・僧智壽實ハ土蜘蛛の精梅幸◇紅葉狩・戸隠山鬼の女・幸四郎◇安宅關・辨慶中車◇土蜘蛛・僧智壽實ハ土蜘蛛の精梅幸◇紅葉狩・幸四郎中座十二月吉例五郎劇◇作業服・吉田兼吉五郎・吉田兼吉五郎・ドラ猫の太八蝶六◇老樹の若葉・妻お金秀蝶・吉兵衛五郎◇作業服・妻お新桃蝶・五郎・酒屋又兵衛一朝◇老樹の若葉・女給露子大磯・散髪屋久吉蝶六・關東煮吉兵衛五郎◇越後獅子の舞臺面◇神戸松竹劇場顔見世◇假名手本忠臣藏大星由良之助延若・早野勘平我童・おかる魁車・寺岡平右衛門市藏・一文字屋お才霞仙・斧定九郎徳三郎

◇昭和五年の終りに、来るべきメモ……………白井松次郎(二)

◇のべの書殘と時雨炬燵……………高安吸江(四)

◇紙屋いろく……………尾崎久彌(七)

◇『忠臣藏』以前の義士劇……………高谷伸(一四)

◇山科閑居雑話……………西尾福三郎(一六)

◇顔見世役割一覽……………(一一)

◇土蜘蛛と紅葉狩……………高原慶三(二二)

◇土蜘蛛について……………遠藤爲春(二四)

◇紅葉狩……………河竹繁俊(二六)

◇能から出た土蜘蛛と紅葉狩……………森ほのほ(二八)



◆鷺娘と戻り駕……………倉田啓明(三二)

周の春・目の正月……………藤井紫影(三八)

に世見顔るせ寄 鷹治郎と曾我廼家五郎……………富田泰彦(三九)

顔見世への期待……………竹内勝太郎(四二)

基盤太平記山科閑居の場……………(二〇)

時雨の炬燵……………(九)

名和長年……………(五二)

お國と五平……………(六〇)

春日局……………(五八)

土蜘蛛……………(三〇)

紅葉狩……………(三四)

鷺娘……………(三六)

戻り駕……………(三七)

安宅關……………(四四)

◆名和長年……………入江來布(五〇)

◆春日局……………吉川觀方(五六)

◆俳優の言葉 ◆挨拶に代へて……………中村鷹治郎(四四)

◆安宅の關に就いてのお話……………市川中車(四四)

◆友之丞再演に際して……………守田勘彌(四五)

◆名和長年について……………松本幸四郎(四八)

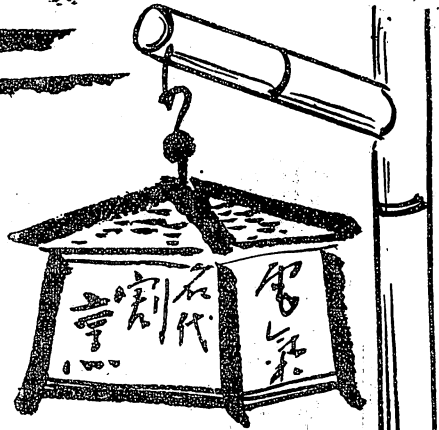
◆新興成美團と明眸禍の演出……………山上貞一(四八)

◆劇壇ニユース……………(九四)

◆劇壇往來……………(九六)

◆挿繪……………田中滿彦

◆編輯後記……………住田冬和



結婚披露宴社交的
宴會に家族的に最適

電 戎
自 一三三三
至 一三三七
番



(舞臺付百疊敷大廣間)

忘年宴會

三十人様以上の御宴會は

金參圓にて御引受

宴會記念寫眞御贈呈

名代
電
天
寺
園



に粧化淡な楚清

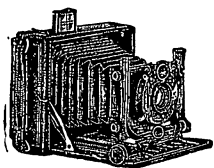
粉白水圓御新

色櫻・色肌・白純

錢十五各



圖蝶胡東伊 鋪本



寫真機は

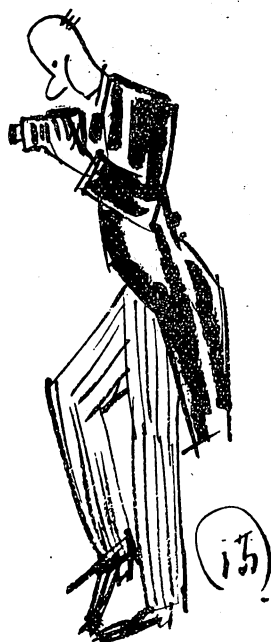
リリーカメラ
パールカメラ
アイデアカメラ
パーレットカメラ

小型活動
寫真機械
各種在庫

◇カタログ進呈◇

肖像・風景・其他凡有る物を
寫真や・小型映畫に残したい
と思召しの時は是非共

長堀橋南詰 小西六へ……

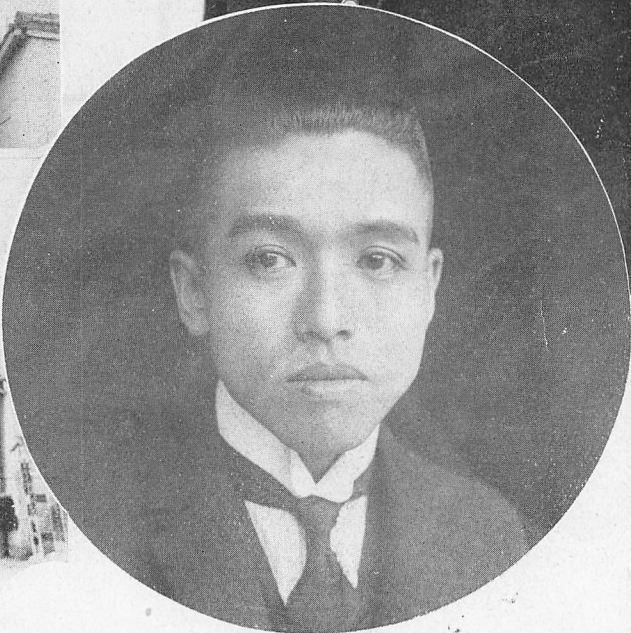
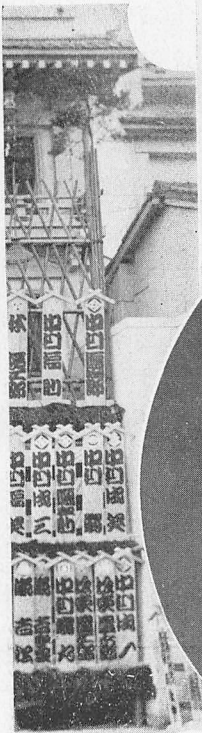
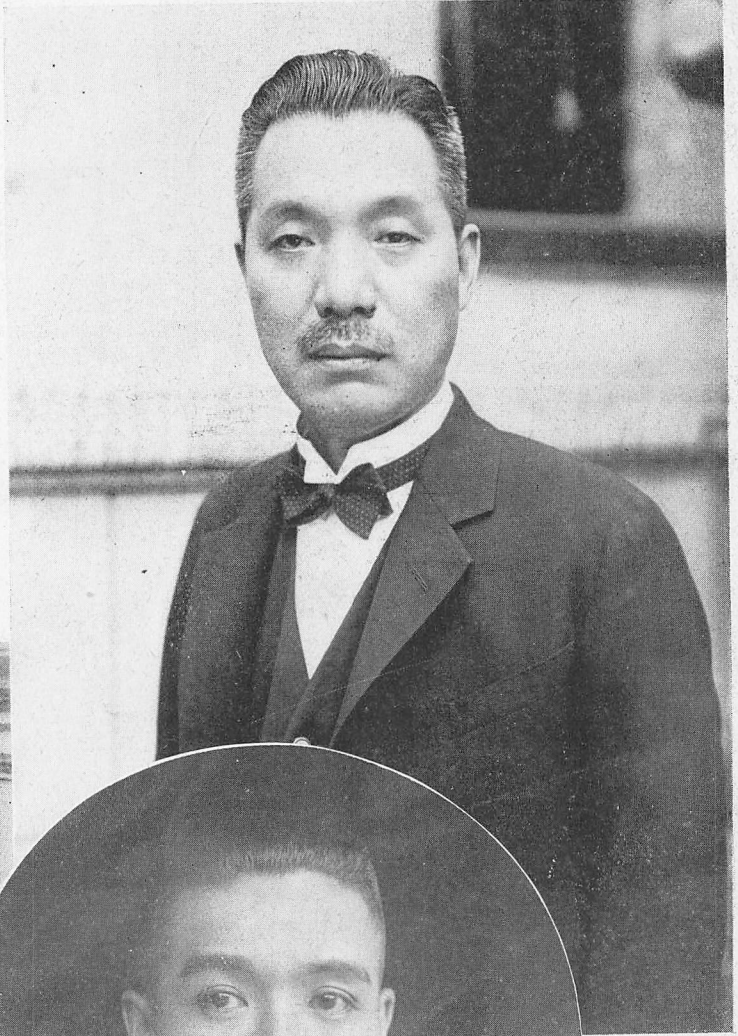




居閑科山 “記平太盤碁” 世見顔例吉座南

助之藏内石大の郎治鷹村中

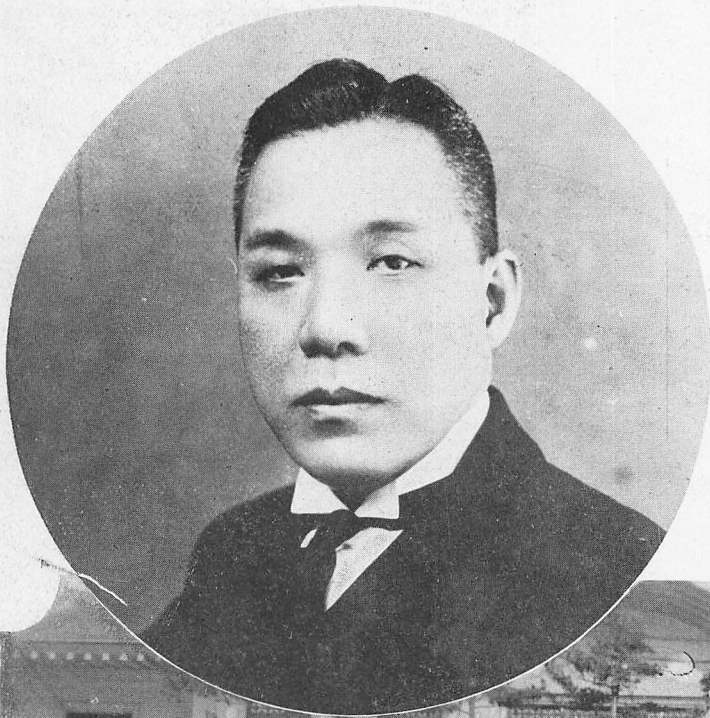
大阪松竹白井社長



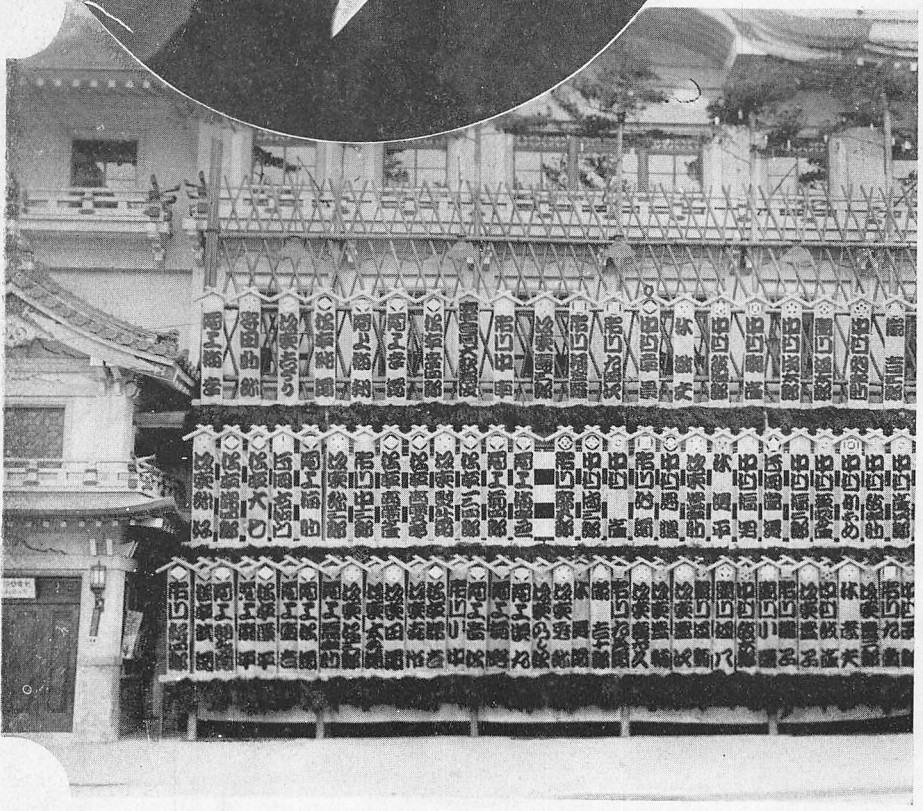
大阪松竹白井専務

招看板に飾られた

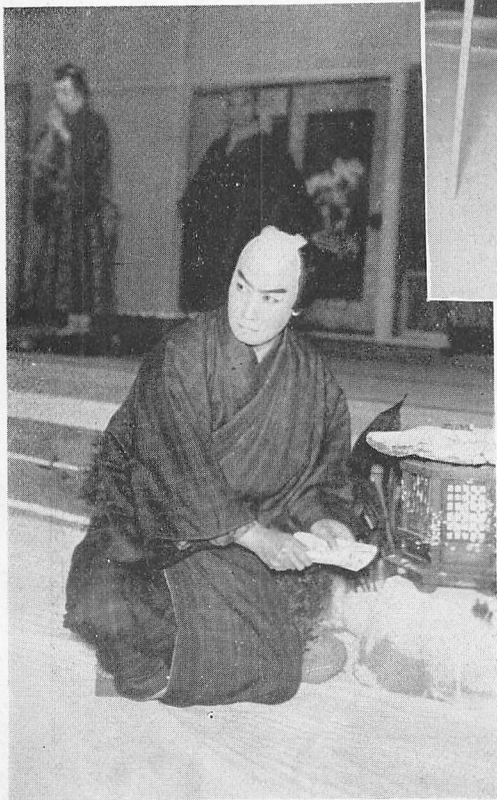
京 南 座



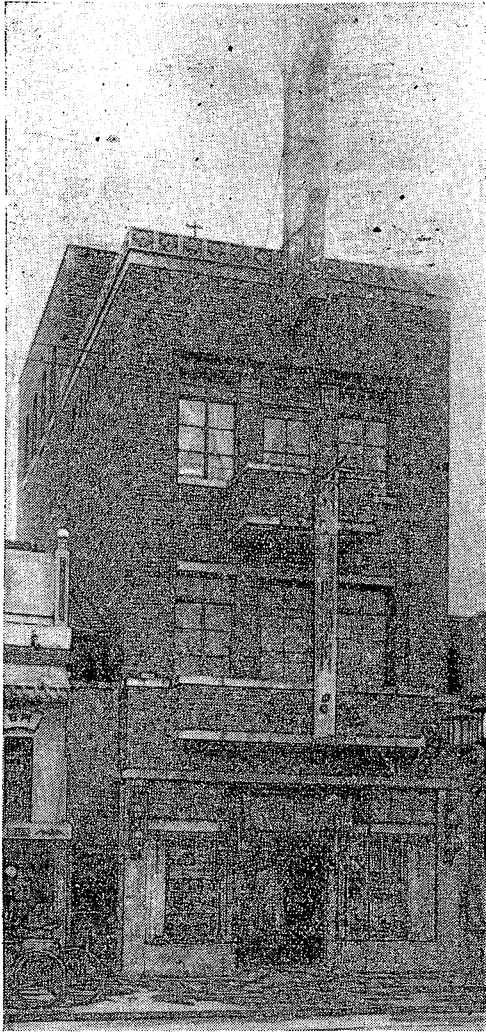
東京松竹大谷社長



碁盤 太平記
山科閑居の場



大石内藏之助 鷹治郎
下男 岡平 幸四郎
京南座 顔見世



江戸趣味
香取屋履物店

東京都祇園四條大橋東

電祇(6)五二番

新 聞 以 外 の 廣 告 機 關

鐵道・電車各驛廣告
京都市電回数券廣告
同 電車内廣告
京都市内湯屋廣告
取扱

實業廣告

ネオンサイン看板

設計製作

御申込に依り
營業案内進呈

三 條 寺 町 角
電 本 四 三 二 〇 番

キシン正宗



絶對防腐劑ナシ

大阪市立衛生試験所證明章貼付

風味樽詰同様

一たん樽に詰め風味を

持たせた樽詰

堀野京都販賣店

土木建築設計請負

白波瀬工務店

京都市中京區仲町通り竹屋町上末丸町
電上四③二八八番

觀劇の御土産は

是非井澤屋で

京南座前

貴金屬袋物
小間物一式

井澤屋

南座内

井澤屋出店

南座の ちもど食堂

御手輕な

觀劇幕間の御食事

東館
同階
同階
三二一階

京で名題のちもとの料理

顔見世芝居は四條南のやぐら

料理の粹と

芝居の至寶

こゝは皆様の御承知どふり

うまい料理はちもとにかぎる

本店
京、西石垣、千茂登

碁盤太平記

大石主税

母およし

長三郎

梅幸



京南座

顔見世



幸梅 さんお房女 “燧炬の雨時”

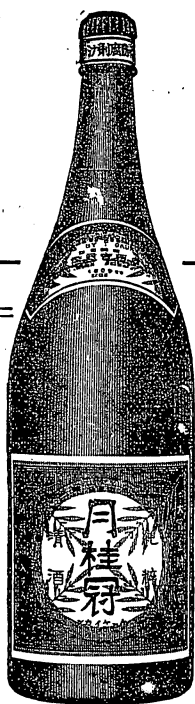
== 世見顔座南京 ==

清酒
月桂冠

皆様の御酒
この芳醇

品質第一

絶対に
防腐剤を含まず

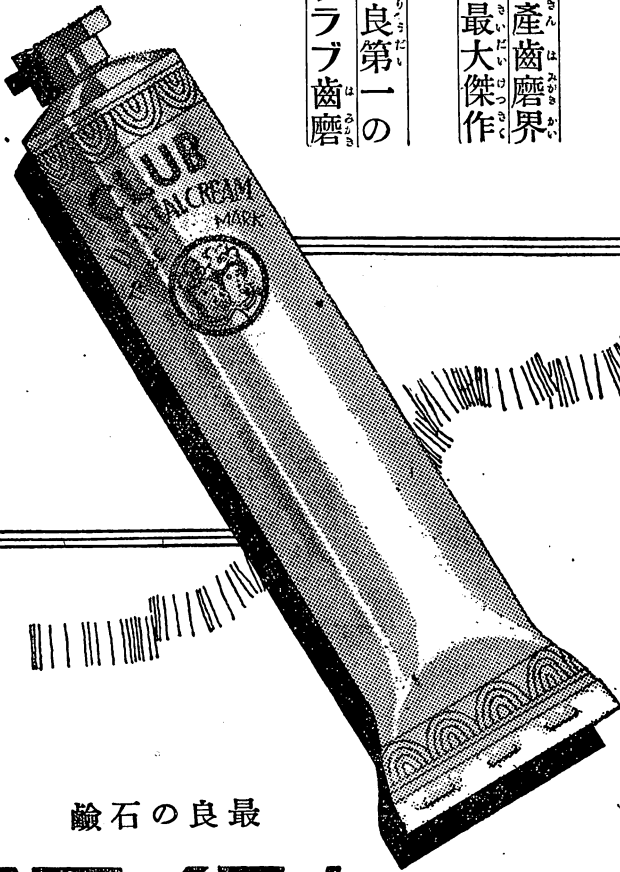


達用御省内宮
釀吟店商吉恒倉大

優 良 國 產 品

ク ラ ブ 歯 磨 粉

國 産 齒 磨 界
 の 最 大 傑 作
 優 良 第 一 の
 ク ラ ブ 齒 磨



最 良 の 石 鹼

カネイテカ

ク ラ ブ 齒 刷 子 本 店 謹 製

電氣諸材料卸問屋

株式
會社
美笠電氣商會

京都市寺町通り姉小路上ル

電話 上(一六〇七番)
下(五六八二番)

大阪市北區會根崎上三丁目二七

電話 北(二四五三番)
南(六五一二番)

東京市芝區兼房町十四

電話 銀座(六三三九番)
六二二五番

本年掉尾の傑作揃ひ

新 興 演 劇

十二月一日發行・定價金參拾五錢

表紙繪・カツト……………森 寛次郎

— 戲 曲 —

失業者の家(二幕)……………鳥江鏡也

細君展覽會(二幕)……………津村京村

花子と鐵吉(二幕)……………森田信義

— 隨筆・小論文 —

明日の劇場への階梯(三)……………野淵 昶

苦言集 十一月道頓堀各座……………曾我部 明

『おハ、ラインハルトよ!』……………新著さりじり……………

— 附 錄 —

女 給(三幕六場)……………廣津和郎原作
鳥江鏡也脚色

編輯後記……………

發行所 大阪船越町二丁目 東市東區 新 興 演 劇 社

營業のおしらせ

- △ 三菱封筒、相生封筒の特約販賣、横封及立封とも
- △ スタンダード宛名印刷器及宛名カードの特約販賣
- △ 封筒、帯封等の宛名上書、と各種書類の淨書
- △ 御得位名簿の調査作成と、其整理
- △ 會社并に商店の記帳と、計算事務の補助員派出
- △ 美術膽寫版印刷の引受
- △ 型録。商報。パンフレット編輯及發行の一切事務
- △ 其他反響ある廣告印刷物の作成と生きた宣傳の創案

公 盛 社

京都市下槇馬場河原町西入

電話 三九四六番



化粧品界の

スター

發賣元

朝日堂株式會社
大阪南久寶寺町四

スキナあぶら取紙

皆さんに

愛用されて居る

製造本舗

中田スキナ屋
大阪

高級な酒場と喫茶

お芝居の

お帰りには

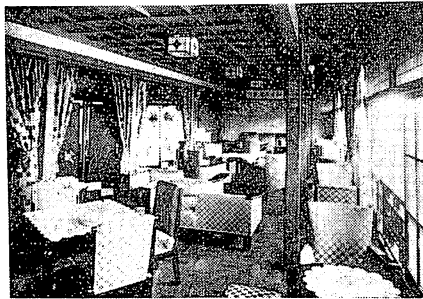
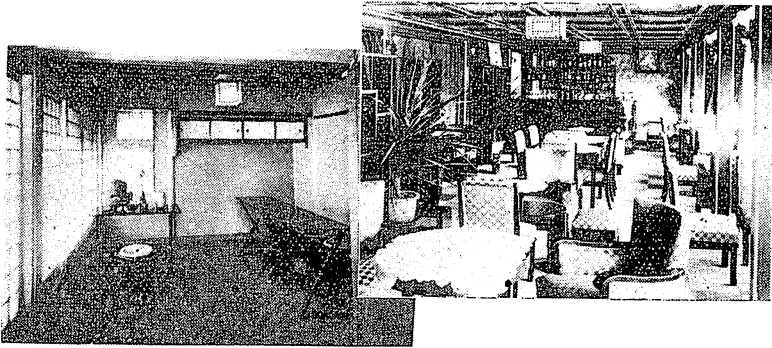
是非お立寄願います

フクヤ獨得のお食事も出来ます

京都先斗町四條上ル

フクヤ

電本(2)六七二一番





郎 治 鷹 衛 兵 治 屋 紙 “ 燧 炬 の 雨 時 ”

＝ 世 見 顔 座 南 京 ＝

時雨の炬燵

丁稚三五郎

扇

雀

鷺

娘

鶯

娘

梅

幸



京南座

顔見世



郎三長 郎四與 “駕 戻”

— 世見顔座南京 —

春日局

稻葉佐渡
お福の方

壽三郎
福助



京南座顔見世



美味
滋養

牛肉寶來煮

御進物は

貫ふ気で

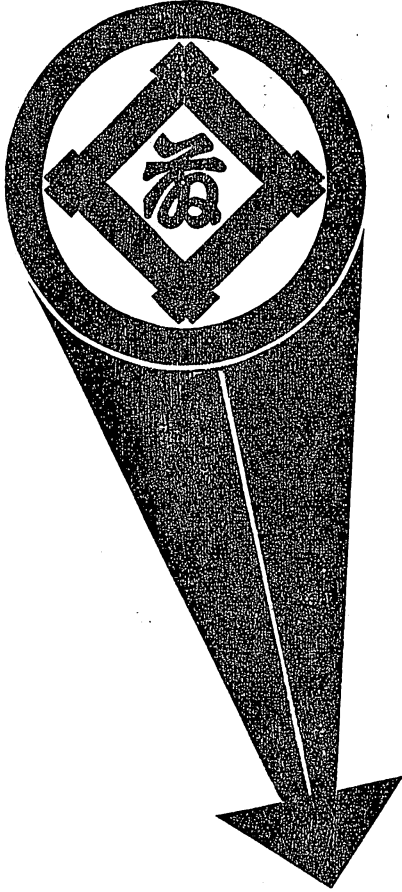
.....

大阪高麗橋
松下商會株式
店

贈るに便利

受けて重寶

商品券



も用御の日明...物買御の日今

大 阪
本 日 橋

松坂屋

大衆向の
百貨店



幸 梅 壽 智 “ 蛭 土 ”

お 國 と 五 平

若 黨 五 平 壽 三 郎

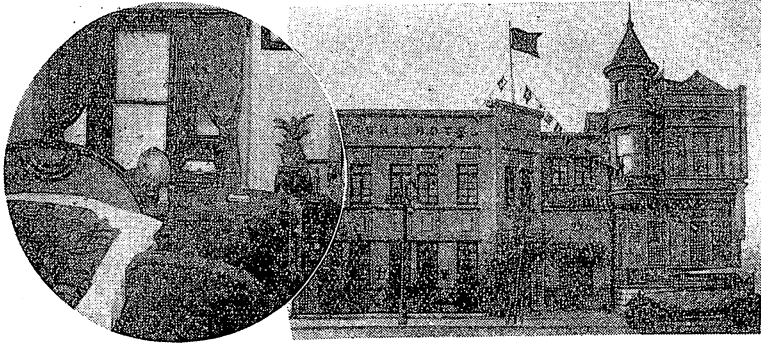
世 見 顔 座 南 京



郎 治 鷹 將 少 條 六 “ 年 長 和 名 ”

== 世 見 顏 座 南 京 ==

新 築 開 業



時代の要求により生れたる……
トテモ必地よきベツトの……

和洋室設備完全
各室電話設備
御入浴隨意

南 地 木 テ ル

電南 三四四〇一

宿泊料 壹圓半 貳圓 參圓
休憩 半 額
食事 朝 30 晝 60 夕 70

其他御好に應ず

大 阪 南 區 難 波 新 地 戎 橋 電 停 西 一 丁

換氣風式淨化槽
給水衛生裝置
特許キヤリアー式淨化槽
煖房冷房裝置
換氣風式淨化槽

設計施工

古市商會

京都市下立賣千本町西入

電西陣四六〇七番

工場 京都市西ノ京伯樂町

林長二郎主演映畫・冬島泰三監督

薩有総動員

千早晶子・浦波須磨子・堀正夫助演

栗島すみ子・岡田時彦主演・小津安二郎監督

紳士淑女
千一夜お嬢さん

田中絹代・龍田静枝・齋藤達雄助演



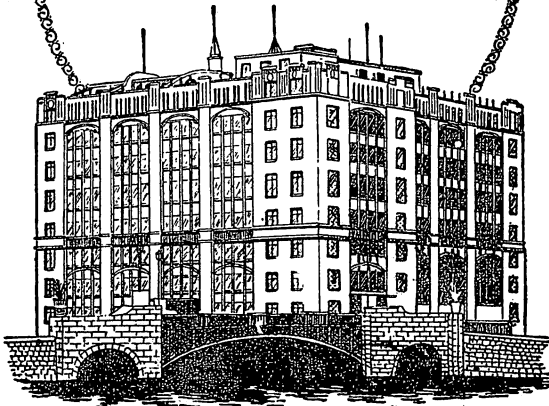
トシセレフスマスリクのマネキ竹松

.. 品作特大二竹松 ..



大同生命

堅實本位なる
そして貯金に勝る
累加配當付 特別養老保險



大阪 土佐堀

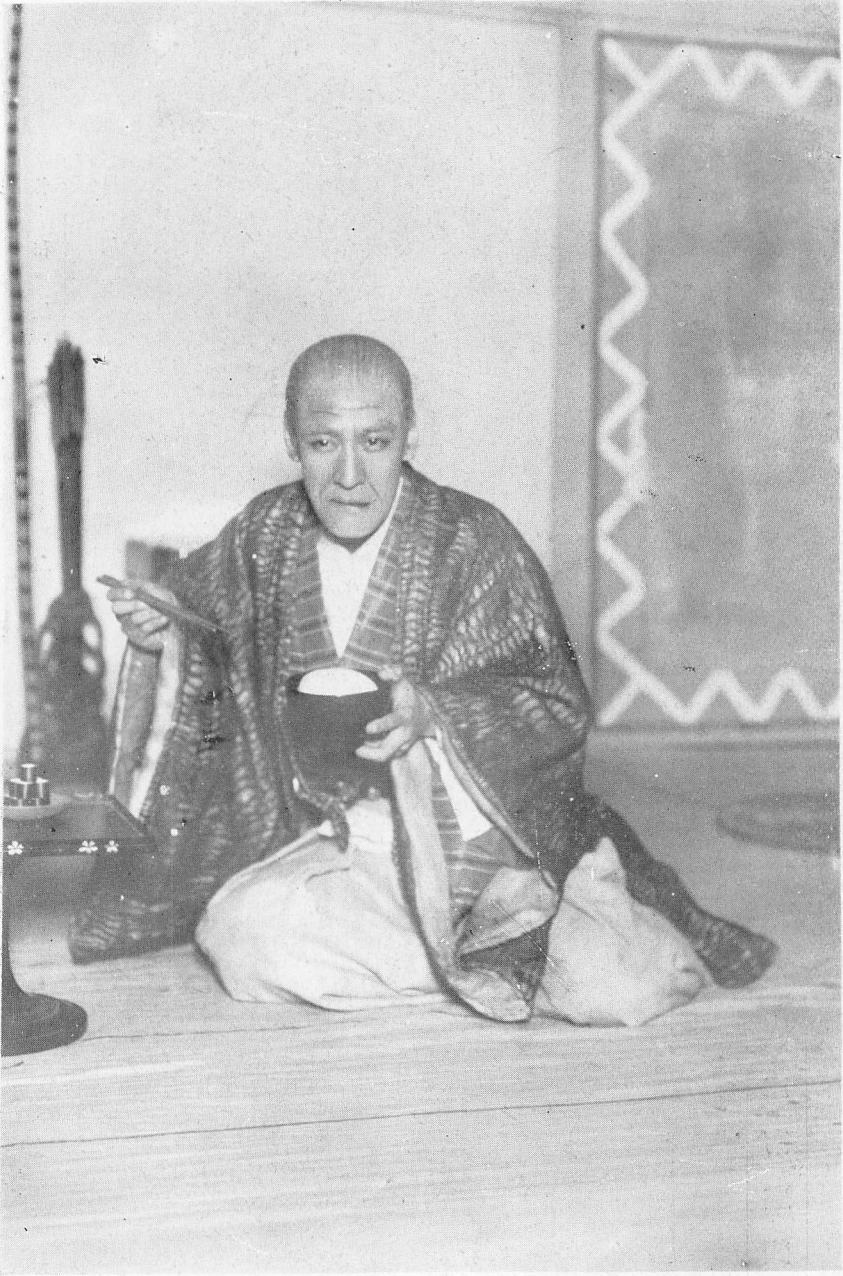
規則書送呈

名和長年

名和長年	薨心	六條少將
幸四郎	勘彌	鷹治郎



京南座顔見世



彌 勘 心 堯 “年長和名”

== 世見顔座南京 ==



紅葉狩

戸隠山の鬼女

幸四郎

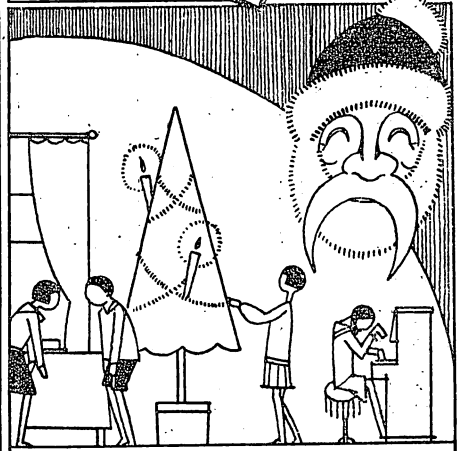
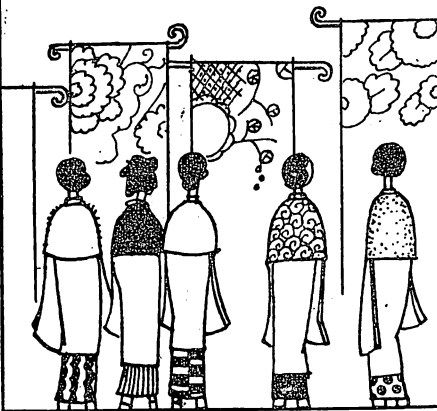
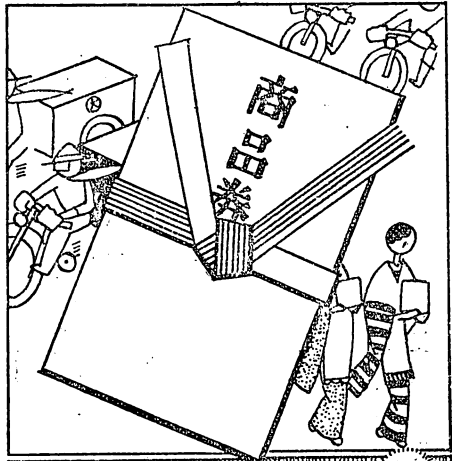
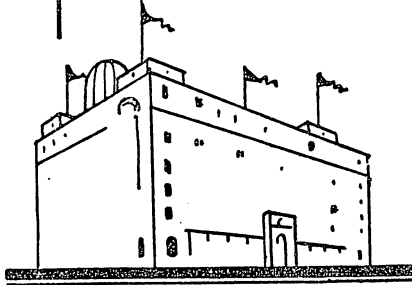
京南座顔見世



郎 四 幸 年 長 和 名 “ 年 長 和 名 ”

— 世 見 顔 座 南 京 —

十二月の大丸



御贈答やお正月の御準備に、あはただしくも歩み來る歳の暮
 店内各賣場は申す迄もなく配達機關其他サーヴィス機關一切充實して皆様の御來駕をお待ち致して居ります

月曜休業・夜間営業



大丸

大阪心齋橋



裂 小・具道小

貸 衣 裳

素人演藝會

宴會の催物

春秋温習會

婚禮の衣裳

松 竹 衣 裳 部

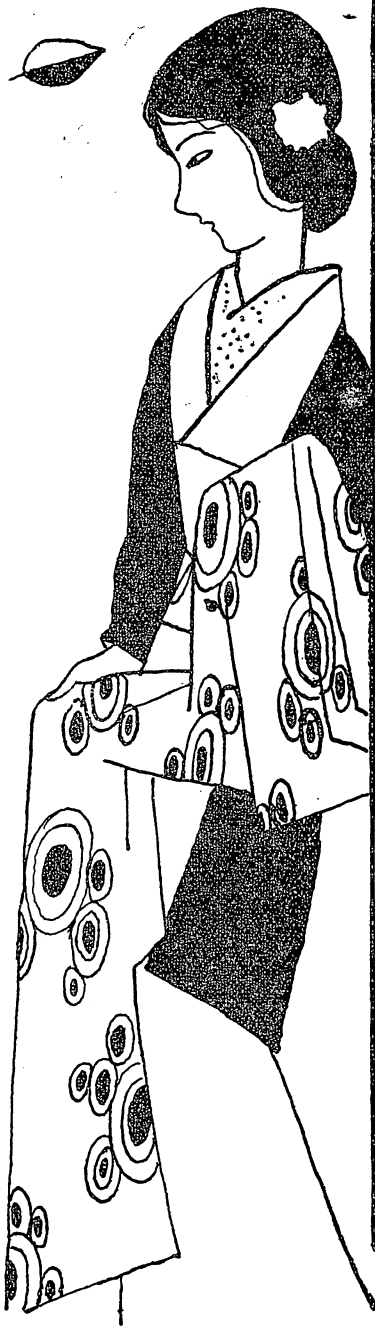
本店

大阪市南區南坂町
電話 戎 五 六 三 四 番

東京支店

東京市淺草區並木町十五
電話 淺草 五 五 九 九 番

(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい)
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます



アングロス井ス

ミルクチヨコレート

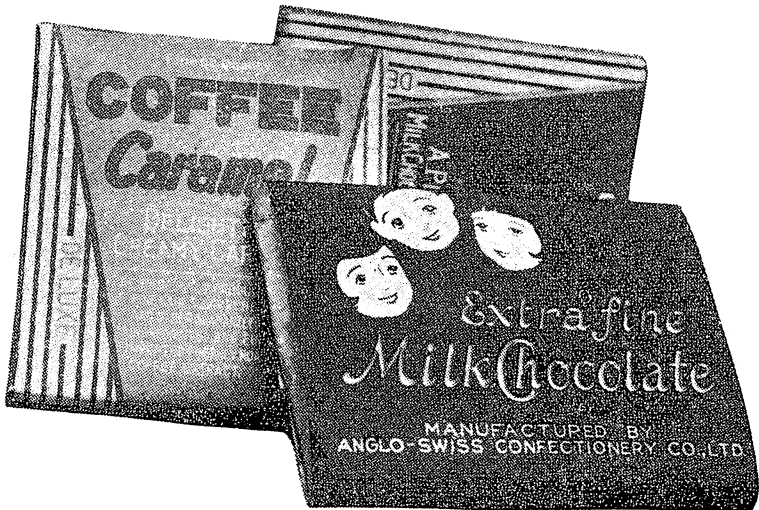
コーヒキヤラメル

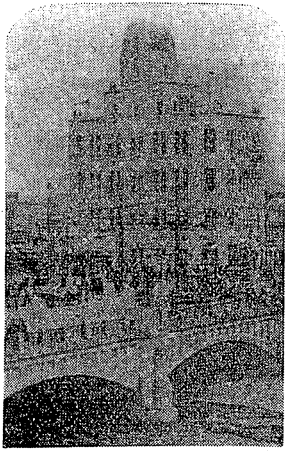
チヨコレート
キヤラメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元
株式會社
横山商店

電話東(94)二〇六一番





幕間の御食事と喫茶は

西館二、三、地階 菊水食堂へ

お歸りには

どうぞ南座前

本店で

おくつろぎ

下さい



桃谷印刷株式會社

大阪東區鶴橋南之町一丁目

電話天王寺 } 二六七〇番
三六七一番 }



車 中 慶 辨 “關 宅 安”

== 世 見 顔 座 南 京 ==



土
蜘蛛

僧智壽實は土蜘蛛の精

梅 幸

京南座顔見世



新大興帝キネマの期待雄篇近く完成

大帝キネマ太秦スタジオ新鋭オールスターキヤスト

如組の喧嘩

巨豪篇

脚色 押本七之輔
關口光昭 押本七之輔 監督作品
名カメラ 鷺田 誠

石田民三入社第一回監督作品 撮影 厨子與一

艶玉篇

切られお富

鈴木澄子・市川玉太郎 主演

帝國キネマ演藝株式會社

劇廣宣圖裝
畫昔傳案飾



阿久田號

神戶市水通三丁目六一
電話漢(5)二四〇番



幸 梅 “娘 鷺”
== 世 見 顔 座 南 京 ==

中座十二月吉例會我廼家五郎劇
 “ 作 業 服 ”

吉田兼吉
 五郎



吉田兼吉
 五郎
 フラ猫太八
 蝶六



👉 **服業作**

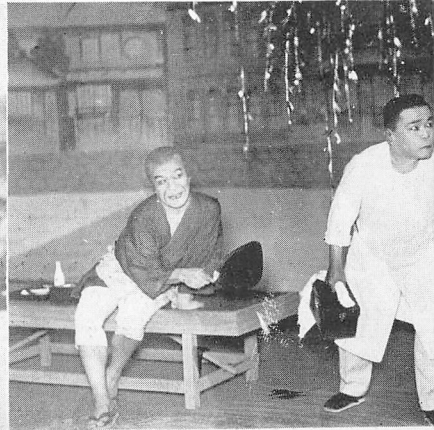
蝶	桃	新	お	妻
郎	五	吉	兼	田
朝	一	衛	兵	又
			屋	酒

👆 **老樹の若葉**

磯	大	子	露	給	女
六	蝶	吉	久	髪	散
郎	五	衛	吉	屋	東
蝶	秀	兵	衛	寮	の
		衛	金	の	妻
		金	お		

👇 **越後獅子**

の舞臺面





若延 助之良由星大 “藏臣忠本手名假”

== 世見顔場劇竹松戸神 ==



假名手本忠臣藏

早野湖平

我童

おかる

魁車

神戸松竹劇場

顔見世



神戶顔見世興行

寺岡平右衛門

市

藏

一文字屋お才

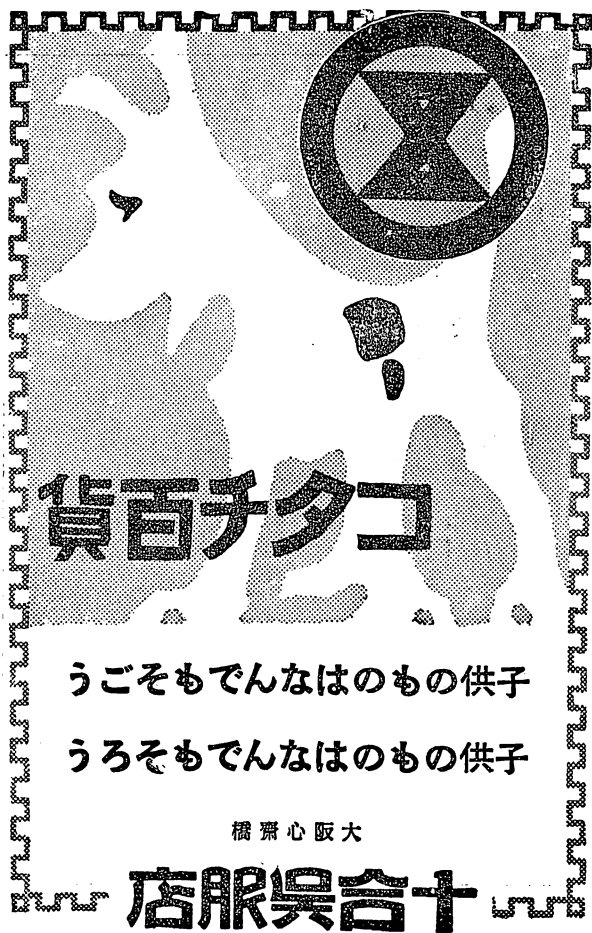
霞

仙

斧定九郎

徳三郎

松竹劇場



貨百チタコ

うごそもでんはのものの子
うろそもでんはのものの子

橋 兼心 阪大

店服呉合十

誌雜 · 究研劇演 · 刊月

十二月號

通類編

第五年

號世見顏 · 座南



其石盤太平記

大石四卷之助

得友郎

得友

昭和五年の終りに

|| 来るべき時代へのメモ ||

白 井 松 次 郎

顔見世の初日を出すと、いつも乍らこれで今年の仕事も終りだといふ氣持が強くなります。が、もうその時にはすでに正月の準備が始められるのです。だから毎年、この代り目が一番私共の心を忙しくさせる時です。——昭和五年の終りにのぞんで、来るべき時代への私のメモを申上げるのも、強ち無駄ではないと思ひます。忙中寸閑を盗んで申上げる事です。私の思ひを充分に申上げられないかも知れませんが、その點はどうぞ御斟酌のほどを願ひます。

私は只今、二つの大企劃を發表するの機會を得ましたので、こゝに大阪歌舞伎座の建設と、又撮影所合流の映畫街創立を申上げませう。

歌舞伎座のことは、既に昨年来度々諸新聞にも報導され、漸やくこの十二月からその建設第一歩の緒に就きました。が、映畫街の方は近く具體的に實現の案を進めるつもりです。

大阪南地に、あの王冠型の娛樂場樂天地が君臨してから久しい間になります。松竹がこの樂天地の經營を引受

けましたのは大正十年です。しかしそれからの時代の進展は驚くべきもので、最早やかゝる大正期の娛樂場に飽き足らず、幾度か改築又改築をほどこしましたが、今度こそはこれを取り毀つて眞に新しい時代の大劇場を建設することになりました。その新劇場のプランの一端を申し上げますと、名稱は大阪歌舞伎座、その内容を申しあげますと、敷地一千三百坪、延建坪五千三百坪で、地上百尺の七階建、觀覽席定員三千餘名、舞臺間口十五間、十間の廻り舞臺といふ東洋一の大劇場です、殊にこの劇場では、歌舞伎だけでなく、レビューや映畫劇場としても理想的な施設を試み、冬の暖房、夏の納涼は最も完全にして、また各階には、食堂酒場など、其他の娛樂機關を配置し、昭和時代を代表する大劇場にしたい意嚮です、これには、大阪府も、當市に世界に誇る一名所を創設する意氣に於て、同建築課が了解ある監督に相俟つて、大林義雄、大林鎌四郎兩氏の大林組では、建築界未曾有の記録を残す意氣込みでか、つていたどきました、この劇場の竣工は昭和七年十月の豫定です。

X

また、映畫街は、東洋のハリウッドとして、映畫經濟の合理化を目ざし、近くその具體案を決定するつもりで居りますが、これに就いては、各映畫會社の賛成を得て、その候補地の決定及び諸種の施設を研究するつもりで居ます。

X

本年は、世界的な不況に直面して、色々の體驗を得ましたが、その中でタツタ一つ、演劇映畫は最早やいかなる場合に於ても人生最も大切な對象の一つであるといふ信念を確信しました。と同時にこの事業がどんな時でも社會教育の一點に關心を持たねばならぬ事も考へさせられます。そして私共はたゞ、この演劇映畫をいかに時代と共に伸展させるかの實踐の上のみ、使命のあることを深く感じてゐます。



のべの書殘と時雨炬燵

高安吸江

享保五年十月十五日網嶋の大長寺であつた心中を、其年の十二月に竹本座で上演したのが有名な近松の天の網嶋ですか、此外題は泥棒か悪魔の末路を云ふやうに思はれ、男女の情死には「のべの書置」の方が平易でよいと、西澤一鳳が其著傳奇作書にかいて居ます。

此のべの書置と云ふのは歌舞伎の外題で、最初は安永三年四月廿一日から道頓堀角芝居で腰越狀の切に出したものです。それから天明二年、同八年、享和三年、文化三年、同八年、文政二年、弘化三年など、角や中で再々演ぜられて居りますが、此弘化の時に延紙書置となつて居る外は皆書置でなくのべの書置であります。

丁度此初演時、安永三甲午の春には大長寺の開帳があつて紙

治小春の書置を諸人に見せたばかりでなく、此れを模寫して板行したのです。それで三田村鳶魚さんの芝居話に記されて居るやうに、此書置が寶曆、明和、安永にはまで出来て居なかつたわけではなく、此れより以前からか或は此機會に製造したか、それはわかり兼ねますが、とにかく右の通り此時には確に存在して居て、例の「南無あみ嶋」や「小春の昔」の追善狂歌二首は此時の住持進譽といふ洒落氣か山氣かの多い坊さんが作つたのであります。

つまり此開帳をあて込み、書置に因んだ名題にして角で上演したのでしやうが、それが今日舞臺にかけられる紙治の元となつて居るやうで、義太夫の心中紙屋治兵衛が出来た安永七年より四年も前に芝居になつて居るのも面白いではありませんか。

尤も此以前に天網嶋の改作で双扇長柄松(寶曆五)や中天噂掛鯛(明和六)が出来て居ますが、此等は場割もすつかり變り、役名も多少違へられて居ります。

のべの書残が何によつて作られ、その内容がどんなのかは、正本を見ない私には一向わかりませんが、安永三年の初演時に淺尾篤十郎が始めててんかい坊をやつて大當だつたと記されてあります。此れは無論近松の「なまいだ坊主がてんかう念佛」から轉化されたのでしやうが、心中紙屋治兵衛以來今日のものにも出て来る傳海坊と同じものらしく、或は此書残から更に義大夫へ逆輸入されたのではないかとさへ疑はれないこともありませぬ。

さて此心中紙屋治兵衛は近松半二等の作で、上の巻浮瀬に茶屋、下の巻長町に紙屋となつて居りますが、その中浮瀬と長町は全然近松には無く、茶屋は近松よりも寧ろ今日文樂や芝居で演るものと殆ど同じです。

然るに紙屋は殊にその後半に於て全く近松其まゝで、唯終りが少し違つて居ります。即ち「藪に夫婦の双股竹ながき別れと」で天網嶋は下の巻へうつるのを、こゝでは「出て行」と續けられ、メリヤスの合方で治兵衛が我子を寢かす中に小春が来るので「何にも云やんな女房共に様子は聞いた、生て居られぬ二人が身の上」と云ふわけで大川筋の橋盡し、三途の川の渡り初、たどり着たる彼岸は、

南無あみ嶋の大長寺、最期所と觀念し、早寺々の六つの鐘此れだけの文句でもう刀を抜放すのを、ヤレ待て〜と孫右衛門が駆つけ、小春の身分の納りも、諸事我胸とハッピ、エンドになります。

是では心中未遂だといふ理由でもあるまいが、此後に今日行はれて居るやうな改作が出来、それが即時雨の炬燵です。種々調べましたが此改作の年代がわかりませぬ。

年表を見ますと、八年後の天明六年に同じ場割で心中紙屋治兵衛として繰り返され、更に五年を経た寛政三年には江戸の豊竹紋大夫が御目見得として出語で演じた紙治の外題が増補天網嶋となつて居ります。

此以後に時々増補とした紙屋の段が上演せられて居るのを見ると、或は此時の増補が時雨の炬燵ではなかつたかと想像されなくてもありませんが、何分其丸本を見ない事ですから斷言は出来ませぬ。

次に芝居としての炬燵ですが、是亦充分に調査する暇がなかつたのは遺憾でした。近世では或は先代延若がやつたかも知れませんが確には申せませぬ。唯名人末廣家中村宗十郎が此場を演らなかつた事だけは確です。

私の見た中で珍しかつたのは明治三十三年十月の東京歌舞伎座で、外題は少夜時雨天網嶋、故五代目菊五郎初演の炬燵です。流石名人だけに先代秀調のおさんと共に實に巧いものでし

たが、何分あの意気な柄では到底天満に年古る千早振紙屋の主人とは見えませんでした。

小春は福助（今の歌右衛門）五左衛門は八百藏（中車）で、此開幕に一中にある髪すきの場を出し今の梅幸が榮三郎時代で髪結のおつなを演りました。

成駒家鷹治郎が紙治の初役は明治十八年三月の戎座（今の浪花座）でしたが、それは河庄だけで其後方々で幾度も上演して居るのは人のよく知る處です。唯同じ十二曲に數へられる炬燵の初演がいつ頃か明かでないのは奇妙に思はれます。

私の手控の中で最も古いのは明治四十五年七月名古屋帝國座開場式の時ですが、無論はより以前に何度もやつたこと、信じます。

近頃では大正九年に昭和二年、原作の方では大正十一年に昭和三年尤も是は大阪だけの事ですから他所のを加へるとかなりの数に上るでしやう。

攝津大塚の炬燵ではおさんが傑作でしたが、越路は治兵衛を得意とし、殊に「三五郎、お米をつれて奥へ行」以下切へかけて全勢力を集中した感がありました。

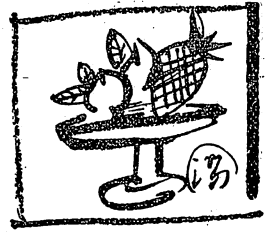
鷹治郎のも越路式に殺しの後小春をつれての引込が素敵ですそれに今回は故京家や魁車と共に、よく彼の藝を理解して居る高砂家の小春で一層面白く見られるでしやう。

唯困つたのは此夏の旅先で腸をいためたのを、大入の魅惑で

ツイ無理押しにおし通した結果、心臓を弱はらして脚に浮きが来たのが、まだ完全に癒りきらないため、脚氣の憐によるめき易うなつた事で、善六太兵衛の立回りから小春と二人花道への活躍が、果していつものやうに圓滑にゆくかどうか、少々心配になつて來るのです。

問題は梅幸のおさんです。亡父五代目の薫陶はもとより、前述の通り先代秀調のも見えて居たらふし、元來研究好きの事として先づ演出上是と云て難すべき點は無論あり得ないでしやうが、申分としてはその涙が隅田川へ流れそうな彼の柄です。近代女形として第一人者である彼が、此難關をどう切りぬけるかといふ事、それから彼の小春に少からず共鳴して、激賞を惜まなかつた鷹治郎が、此おさんをどう考へるか、など何れも興味の深いものでなければなりません。

あまり長たらしい時雨もうつ陶しいですから先づ此邊で止にしの風晴と致ましやう。



「紙屋」いろいろ

尾崎久彌

今度の南座吉例の顔見世興行は、其狂言が晝夜とも新舊の作とりまぜて、舊と雖も無論新味を持たせて、新舊雑多な好尚の觀客に、凡てに向くやう安排してあるが、それにしても、つまりは何處までも、やはり「歌舞伎」の範圍と接觸してゐるだけ其處に當事者の苦心もあらうが、私のやうな尙古趣味者からは、有りがたい事だ。

さて、そのうちでも、私の好尚が、最も眼ざすのは、やはり「時雨の炬燵」である。

X

あの「炬燵」には、誠によく上方の臭が滲んでゐると思ふ。わけて上方世話物の代表ともいつてよい。江戸文藝といつても、嚴密には、前期の享保頃までが上方中心、享保以後は、江戸中心で、享保以後には、義太夫と芝居の外は、他の俗曲又は小説

類の大部分は、中心勢力は江戸に奪はれた。

が以後の江戸文藝の基礎は、上方が爲した。江戸の小説の初めとも謂ふべき洒落本も、元は上方の浮世草紙の變化、江戸へ行つた豊後掾の豊後節の心中物も、その淵源が大近松の世話物別けて心中物にありとも、大擱みだが思はれる。

(無論師匠の一中節も心中物が多いが)とにかく我々は、今此の早計な見方を放れても、小説は勿論だが、俗曲に於ても大近松の世話物(心中物)は、廻り廻つて、江戸の豊後節から生れた新内節を曾孫位に(顔の最もよく似た曾孫)持つてゐるやう即ち小春治兵衛が、やがては浦里時次郎、此糸蘭蝶となつたのだと。ともあれ此の上方と東の對比は面白い。

小春治兵衛も、おさんを入れて三角關係。新内の蘭蝶も、お宮を入れて三角。が、流し本位の新内は、小春治兵衛などの操

り物に較べて、遙かに單純、無構想で、戀敵なんて、てんで現れさうにもない。「明鳥」に於ては、最も單調である。

がどちらでも女性中心たることは、同じで、強ち色男たるが故にはなからうが、わけて治兵衛の、時次郎などに較べて弱いこと。弱いといふのは、上方物は、どうも男が女に負ける。新内では男女對等に近い。それは、享樂から發達した女が主の方と、戰爭から發達した男が主の江戸との相違かも知れない。

(江戸も末期になると、女が主で、人情本などすつかり男が弱いが)がその負けてゐる治兵衛も、前場「河庄」では、脇差を突込み女を打ちのめすからえらい。——が「紙屋」の三角關係になると、遙かに面白い。

新内の蘭蝶も、三角に觸れるが、經濟人として立つてもゐるた悪くいへば打算的な、女には弱いが算盤には強い、利己主義なより意識的な、大阪といふ商業都市の空氣をうけた治兵衛の、三角關係の苦悶には、及びもつかぬ。

新内ではお宮はてんから問題にならず氣の毒だが「炬燵」では、おさんこそ悲劇にはなつたが、却つてそのおさんは、治兵衛と小春を壓して、勝利者の如く見える。聰明であり、治兵衛等兩人を愛することの深い、母婦的(家婦的とも見て可なり)の典型である。

小春こそあはれで、おさんに濟まずと思ひながらも、身請を振切つて、心中の相圖に來る。そこに却つて純一な愛慾に溺れ

拔差ならなかつた憐れさがある。

治兵衛は、男の意氣地故、泣くと辯解した。大分はうその辯解で、未練たつぶりの物だつたらうが、それにしても、炬燵で泣いてるだけの餘裕があつた。小春こそ來なかつたなれば、或は、本氣になつて母婦美のおさんに、一時を忘れたかも知れない。

またおさんの美の分る利口さ之餘裕も把持してゐた。が、人間の本性、またいつか母婦美には飽いて、娼婦美を求めたかも知れないが。——新内のやうに、オイソレと捨鉢になりきれない、一氣呵成に決行する勇氣のない、戀愛意識と社會意識とちぐはぐな、現代の我々からいへば、(その氣持が一層複雑にはなつたが)母婦美にも心を惹かされがち、娼婦美にも隨喜した治兵衛の方に、より多く現代味が有るのかも知れない。

——が、結末に於て、江戸の末期の人情本のやうに、妻妾同棲の姑息を探らないだけ、純たつたとも思へる。がこんな理窟なしに、玩辭樓氏のあの優婉な曲線は、我等をして、かうした反語や低徊を繰返しめない裡に、甘さの濃い、それでてはかないシーンを進展させて行くから、不思議だ。結局は「娼婦美に溺れ行く心」を、まぎく見せて、我々に同感と恍惚とを強ひるから、恐ろしい。

時雨の炬燵

(おほむ石)

紙屋の場

治兵衛 ヤアコリヤ是れ小判五十兩、どうしてこなたが

おさん サア、此金の出所も後で語れば知れる事

此晦日に岩國の仕切り銀に才覚はしたけれど、それは兄御と談合して商ひもの尾は見せぬわいなア、小春さんの方は急なこと、ソレ此小判五十兩、残り私が

かい立て、明けて取り出す染小袖、兼て斯うとは白茶裏、黒羽二重も色かへぬ、淺紫の糸目縫つた鹿子も惜げのう、小供のものもかい集め、内わに見ても二十兩、よもや貸さぬと云ふことはないものまでも有る顔で夫の耻と我義理を、一つに包む風呂敷の内に情ぞ籠るらん

ト、この淨るりにて算筒より中の衣裳を出し風呂しきに包む

治兵衛見て、自分の羽織を脱ぎ一所に持つて行けと渡す

おさんはもうよいと云ふこなし

おさんは自分の櫛をとり笄箱へ入れて質の通ひを入れてつゝみ、思ひ入れあつて

私や子供は何着いでも、兎角男は世間が大事、身受けして太兵衛に、一分立てゝ下さんせ

言へどいらへも涙ごえ、

治兵衛 ヲ、過分なぞや、したが手附渡して取りとめ、請出してかこふて置か、内へ入れるにしてからが、そなたは何んと

云ひさして打ちしほるれば

おさん 何のいなア、かならず察じて下さな、ハテモウ子供の乳母か、飯焚きか、面倒ながら、眞實の妹を持つたと

思ふてといふも胸までつかへ、涙呑み込みくで夫に立てる貞節は、傍でみる目もいぢらしい

治兵衛 コレ何にも云はぬわいのう女房共、親の罰、天の罰、佛神の罰に當らずとも、女房の罰が恐ろしい、

赦してくれとばかりに、手を合はしたる詫び涙、

おさん ア、コレ勿體ないくわいなア、手足の爪を放しても、皆な夫へのためぢやもの跡の祭では詮ないこと、サア早く、コレ三五郎

三五郎 此時奥にて

呼び立てられて三五郎、目をすり赤め立出でる

お家さん、何ぞ用ですか

おさん そなた、これを持って旦那はんの供をして行きや

三五郎 旦那はんの供なら、北の新地か、そいつあ嬉しいく

治兵衛 エ、むだごといはず此の風呂敷包みを背負ふのぢや

三五郎 オットせう

渡す風呂敷懐ろへ金押入れて立上る
出合頭に五左衛門

ト治兵衛以前の金包みを懐中す
る

三五郎は風呂敷包みを背負う
此内下手より五左衛門着附袴羽織の
拵へにて出て來り入口をあけて

五左衛門

治兵衛内にか

メずつとは入れば、顔見て恠り

ト是にて治兵衛おさん恠りして

治兵衛 オ、男どの

おさん とゝさん、悪いところへ

五左衛門 ヤア

治兵衛 よふお出で

メ夫婦はもち／＼三五郎が脊に負ひた
る風呂敷見つけて

五左衛門

コリヤ阿呆め、その包み何處へ持
つて行く、又質屋へうせるのか、こつちへ

おこせ

メ引きたくられ恠り拍子、ぬけ参りの
背に知れたる心地なり、一と間の内
へ入りにける

ト風呂敷をむりに引きたくりと
られ、のれん口へ逃げては入る
大方斯うであると思ふたわい、着るゐ着
そげを質にまげてお山狂ひへ仕上げるのち
やなア、コリヤ、ヤイ、女郎の誠と鬼がは

治兵衛

鷹法師



らの笑ひとはないものぢやぞよ、サア、手
みずかにおさんに暇やりや、女の子は母に
附くが世間の大法、お米はさつきに孫右衛
門がつれて戻つた、その時になんぢや
コレこの誓紙をびけらかしておれに見せた

ラ、えらいようでもどこぞが若い、こんな
で行くぢやないぞよ、誓紙の代りに去り
状かけ、エ、あんたらくさい

メあんたらくさいと

メ引きき／＼治兵衛が顔へ打ちつけて
お上にどつさり大白なり、おさんが

きがね

ト是れにて、誓紙を引きさき捨
てキツトとなる

おさん 思入あつて

五左衛門 何んぢやい

おさん エ、お前聞こへませぬぞへ、聞こへ
ませぬわいなア、こちの内的身代の、
おとろへたも皆お前から起つたこと、ない
もせぬ銀山にかふつたといふて三十兩かり

五十兩かり、揚句にはその銀山がつぶれた
とやら、元も子もないやうにしてしまはし
やんしたぞへ、男氣の治兵衛さま、眞のこ
となり云ひ出せばこつちも恥と、證文も残
らず戻し濟まじやんした、その時にはコレ

そのこわい顔に涙をこぼして拜まじやんし
たこと、よもや忘れしやしやんすまいが

あゝお前、又主の悪所通ひも、元の起りは
 こなさんから起つたこと、歴と仕分けて貰
 ふた身代、まア何しに金が減つたぞと、本

おさん
 梅幸



家不審が立つた時、ハテ男どのに取られま
 したと鼻毛らしう云はれもせずと、口へ出
 して云ひこそさつしやらねど、こゝろせし
 を推量して、初午の間の茶屋通ひは、世間
 へ聞えにでもさつしやること、本にやれ
 く行かしやんす度毎に、後影を拜んでゐ
 たわいなア、その大恩も打忘れ、阿呆ぢや
 の、イヤたはけのと假にも勿體ない、堪ら
 へて下されこちの人、とゝさん往んで下さ
 んせ

〽なだめつ叱りつ兩方へ、我が身一つ
 のせつなきつらさ、思ひやられて道
 理なる、思ひは同じ浮思ひ、身の言
 ひわけに紀の國や小春は爰へ來かゝ
 りて、様子ありげな内の體、逢ふて
 はいかゞと用水の、かげにかくれて
 聞き居るをば知らずして、治兵衛は
 手をつき

ト、これにて向ふより、小春好
 みの拵らへにて頭巾を冠り出で
 來り入口より内の様子を伺ひ、
 思入れあつて下手の用水のかげ
 にかくれる

治兵衛 御立腹の段は御尤も、シタがおさん
 が申すは皆むだ言、私心に存せぬ事、此儘
 そはせて下さりませ

ト、いふをかぶせて
 五左衛門 イヤならぬわい、何にも云ふ事、
 聞く事なわい、おさん戻せば事は濟む、
 併し拵へおせし道具衣裳、吹めて封付け
 て置かふわい
 〽立上ればおさんはおどろき

おさん ア、コレとゝさん、衣裳道具も揃ふ
 てるある改めるには及ばぬわいなア
 五左衛門 エ、退け、のきさらせ、
 〽かけふさがれば、突さとはし、ぐつ
 と引出し

小春
 足助



ト、五左衛門はおさんが遮るを
 振りはらひたんのすの引出しを明
 ける、
 〽一重二重引出しの数も有るだけ押入
 まで底を叩いて五左衛門、口あんぐ
 り……………。

世 見 顔

確 内 河 井	侍 黨 瀧 三 郎 義 貞 光	郎 女 村 源 之 丞	侍 渡 女	次 男 孫 源 望 月	酒 井 雅 樂 基 長 頭	吾 妻 與 四 郎	戶 隱 山 の 山 神	番 卒 太 郎	大 石 主 郎 稅	紀 之 國 屋 小 春	遠 藤 頼 お 國 光	源 類 お 春 光	お 福 の 方 後 に 春 日 局	紙 屋 治 兵 衛	六 條 少 將 忠 顯 卿	大 石 内 藏 之 助
------------------	--------------------------------------	----------------------------	-------------	----------------------------	---------------------------------	-----------------------	----------------------------	------------------	-----------------------	----------------------------	----------------------------	-----------------------	---	-----------------------	---------------------------------	----------------------------

駒	吉	長	福	鴈
之	三	三		治
助	郎	郎	助	郎

侍 祐 女	常 筆 越 田 每	旅 陸 坊 海 綜	板 倉 伊 空 賀 守	男 五 左 衛 門	戸 隱 山 の 鬼 女	富 樫 之 介 家 直	名 和 長 岡	下 男 所 岡	大 御 所 家 康	◇	粉 屋 孫 右 衛 門	武 藏 坊 辨 慶	母 千 辨 壽	若 黨 五 平	信 濃 坊 源 盛	稻 葉 佐 渡 守	江 戶 屋 太 兵 衛	醫 者 太 兵 衛	侍 新 玄 伯 吾
-------------	-----------------------	-----------------------	----------------------------	-----------------------	----------------------------	----------------------------	------------------	------------------	-----------------------	---	----------------------------	-----------------------	------------------	------------------	-----------------------	-----------------------	----------------------------	-----------------------	-----------------------

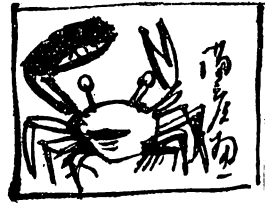
梅	幸	幸	中	壽	箱
		四		三	登
朝	藏	郎	車	郎	羅

— 役 配

伊千本郎 波多上野 三郎介	郎黨原田重作	女三小男乙 姓花童丸 野	女小姓雪路	駿坂青角 河田山倉 次公善一 郎時守	丁侍將 維女軍 三五郎	侍番召侍 女卒使女 岩次お飛 橋郎さよ鳥	太刀持小源太	長男千熊後 <small>に</small> 稻葉丹後守
九	章	敏	政	扇	成	延		
團	景	夫	治	雀	太	太		
次			郎		郎	郎		

驚女房おさ娘	妻智簀實は土蜘蛛の精 およし	浪余五將軍維茂 花治郎作	源無僧實は池田友之丞 判官義經	成田小三郎堯昌心 井保義	從龜者運平	日野又三郎義泰所 井六郎	秀忠の御臺所	從鴛尾八内郎	六郎太郎藤内氏正 瀬太郎義氏	成瀬準人正
--------	-------------------	-----------------	--------------------	-----------------	-------	-----------------	--------	--------	-------------------	-------

梅	勸	し	純
。		う	
幸	彌	か	藏



忠臣藏以前の義士劇

高谷伸

今は芝居の獨參湯と言はれる竹田出雲の假名手本忠臣藏が竹本座で上演せられた寛延元年は、元祿の事件以來不思議にも義士の數の四十七年目である。

その間に赤穂浪士を取材とした戯曲は二三ならずあつた。碁盤太平記もこの忠臣藏前派の戯曲の一つなのである。

最初、舞臺に現れた赤穂事件は浪士切腹の後、僅々十二日の元祿十六年二月十六日から江戸中村座で演ぜられた「曙曾我夜討」がそれで、少長の曾我十郎、傳吉の曾我五郎が、曾我を看板にして義士討入を匂はせたとといふことであるが、公儀への遠慮から三日限りで中止となつた。しかし、これは單に赤穂義士を暗示した歌舞伎であつたが、事件後四年目の寶永三年にはそれを鹽治判官と高師直の世界に直して、かなり事實に近づいた淨瑠璃が現れた。それは近松門左衛門の手になつた「兼好法師物見車」で、しかもその跡追狂言、即ち續篇として演ぜら

れた所の「碁盤太平記」によつて、鹽治事件は淺野事件であることがはつきり證明されたのである。

それは鹽治浪人八幡六郎今は大星由良之介殿と殆んど完全に名を改めてゐることである。大星由良之介が、大石内藏助であることは萬人周知今さら言ふだけ野暮である。

操りでは由良之介であつたが、歌舞伎ではこの時代ではまだ大岸宮内であつた。それは寶永七年大阪篠塚庄松座で演ぜられた「鬼鹿毛武藏燈」で吾妻三八作、宮内には座元の親篠塚次郎右衛門、力彌には佐野川萬菊が扮し大當りで、六月十日から九月十一日まで興行したといふことで、後に紀海音が豊竹座に上演した「鬼鹿毛無佐志燈」はこれから出てゐるといふことである。以來、歌舞伎に操りに赤穂浪士事件はいろいろ、脚色せられ假名手本忠臣藏を出しそれ以後にも百以上の義士劇を作り出すやうになつたのである。

碁盤太平記の戯曲構成の系統は同じ近松の同年正月に書いた源義經將碁經に出て假名手本忠臣藏の九段目に續いてゐる。

將碁經の將碁の技巧は碁盤太平記によつて碁として生き、黒白の碁石の布置は、九段目で師直屋敷の繪圖と變じてゐる。その上に弓の弦を斷つて兩戸に仕掛ける策戰も既に碁盤太平記に現れてゐる所のものである。

「兼好法師物見車」は寶永三年五月五日初日で蓋をあけ「碁盤太平記」は六月一日から添えられたもので、これによつて物見車の不評を挽回するつもりだつたらしいが、時期がわるかつたのか興行成績はさほどでもなかつた。しかし山科閑居の構想は前に述べたやうに九段目ではつきりと生かされたのであつた。

鷹治郎が「碁盤太平記」を渡邊霞亭の脚色によつて上演したのは明治三十四年頃だつたかと思ふ。この作と近松の原作とを比較して見ると、第一の相違は岡平の素性である。

原作では岡平實は寺岡平右衛門で岡平の二字の出所も明かであるが、今では高村逸平太である。村一では按摩のやうだから假名はやはり岡平だが、それでは意味を成さない。その脚色された時代は活歴の餘弊で、とかく理屈詮義が喧しく、岡平が赤穂方で、師直方を探るうち誤つて重用され密偵となつて派遣されるが、表面密偵で内心は虚偽の報告を發してゐる内、力彌に斬られて本心をあかすといふ二重三重の裏の裏行く、芝居の伏線が否定されてゐる時代だけに、岡平の立場も單純に眞物の密

偵が義心に感じて師直屋敷の地理を教へると、至極さらりと訂正されてゐる。どちらかが面白いかは觀る人の心に任せるが、岡平の役のわるくなつたことだけは争えない。

第二は、由良之介の母と妻が、死を以て諫めたり勵ましたりする所が、單に親子夫婦の別離となつてゐる。これは訂正された今の方が無條件によい。今の見物は生命を昔ほど安く扱ふことを喜ばない。死を以て勵ますといふ手段も、あまり見飽きてゐる。別離の情を深く見せた方が胸に迫ることが多い。

近松の碁盤太平記はこの山科と討入とで纏められてゐるが、山科だけでも充分芝居になつてゐる。これを九段目に較べると古いだけに變化なり色彩なりに乏しい點はあるが、最初の忠臣藏淨瑠璃として見る時、流石に興味の深いものがある。

殊に無筆と見せて間諜に入つたのを發見する力彌と岡平とのやりとり、それと知りながら裏の裏のまた裏を行かうとする由良之介の腹など、この芝居の山である。碁盤太平記以後、忠臣藏前派に屬する義士劇は、武藏鎧の外歌舞伎では「鎧櫻 故郷錦」八段物、江戸中村座澤村訥子(享保二十年)「忠臣いろは軍記」九段續、江戸市村座津打治兵衛作(京保二十年)「樵武者いろは合戦」九段物、中の芝居並木丈助(寛保元年)「大矢數四十七本」九段續、角の芝居並木永助(延享三年)「操りでは忠臣金短冊」五段續、豊行座並木宗輔(享保十八年)「忠臣いろは夜討」五段續、京東の芝居宇治加賀豫(元文三年)など。

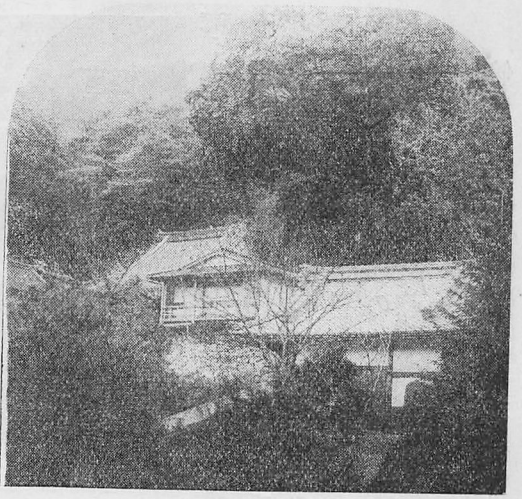


山科閑居雜話

西尾福三郎

碁盤太平記の原作は、近松五十四歳の時(寶永三年五月)「兼好法師物見車」と題する二段物を新作上演した際、その三段目として一月遅れて書き加へられ、三段續きのものとして上演されたその時の外題である。寶永三年は義士打入の五年目に當る譯だから、この作品は、今日の膨大な忠臣藏狂言の原流として斯道の研究者からは相當重大視されてゐる。今も昔もその筋の役人を愉れた事は同じだと見えて、この外題を二つに別けた理由は、もし太平記で檢閲に引つ掛つたら兼好法師だけを獨立のものとして演つて行く下心であつたらしい。今日義士狂言中の「壓巻」と云はれる竹田出雲等の「假名手本忠臣藏」が出たのは、此に後れる事四十五年であつて、その中の人物や趣向を、大體この近松物のプランに倣つてゐる。道に稀世の大作者出雲も、近松の前には頭が上らなかつたものと見える。碁盤太平記は假名手本でならさしつめ九段目と云ふ所だが、岡平の密書を主税

が偷見する所等は、茶屋場で逆用されてもつと効果的に使はれてゐる。今度の霞亭氏脚色の物は、近松の碁盤太平記の前半を鴈治郎向きに書き直したものである。原作では母と妻とが自殺して由良之助親子を諫める時、初めて本心を打ち明けられる事になつてゐるが、茲では妻は離別母からは勘當されて、そのまゝ、本心を明かさずに東と西への別離を描いてゐる。その他原作では岡平實は寺岡平右衛門となつてゐるが、茲では高家の臣高村逸平大が岡平となつてゐる。筋立は忠臣藏の原始物だけあつて、至極大まで食ひ足らぬ點があるけれども、玩辭樓十二曲と稱するだけあつて、これを活現する成駒屋の腕前は充分にこなれきつてゐる。作者と役者の力が五分と五分にガツチリと組み合つてゐる紙治等に較べてこれは確かに成駒屋と云ふ役者が作品を引つ擔いで自由自在に



義士木像堂

こなきつ
てゐる腕の
牙へを觀取
する事がで
きる。尤も
餘りこなし
きつて誰か
の或物のや
うに味も素
つ氣もない
物にされた
ら困るが、
とにかく成
とにかく成

駒屋のそれは、緻密な技巧が心憎い程極度に行き渡つて實に手
順のうまい演出である。

さて山科閑居の史蹟であるが、大石良雄邸宅の跡は、今の山
科町字西野山山科神社華素前茶園の側にある。邸宅だけはその
後大野木某と云ふ郷士が買ひ取つて同町大字安朱に移轉したが
いつしか亡失して、今は茶室の欄間だけが保存されてゐる。五
三の桐に唐草を透し彫りしたもので所々缺損してゐる。だから
現在では邸の跡と家の跡とが別々になつてそれ／＼名所になつ
てゐるが、こんな名所は数が多い程重寶であらう。岩屋寺一名

義士寺は大石邸跡の側にあつて、當寺の本尊不動明王は良雄の
念持佛であつた。大石が山科を引拂ふ際、邸宅田畑遺物の類を
當寺へ寄附して東へ下つて行つたのだから、現在も數多の遺品
が岩屋寺に保存されてゐる。

所で、何故良雄は山科へ閑居するやうになつたかと云ふに、
同じ赤穂の浪人組で、元は鐵砲頭を務めて三百石を貰つてゐた
進藤源四郎と云ふ士がこの山科の豪族であつた。それが良雄と
相婚（良雄の妻の姉の夫）だつた。この人は義士の徒黨には列
してゐないが、淺野大學を擁立する運動に終始してゐた謂はゞ
當時の保守派だつたのである。その外、程近い男山八幡の大西
坊には、良雄の弟、專貞が出家して居り、尙、大石家の一族小
山家より養嗣してその法統を承ぐ事になつてゐた。その外京の
近衛家には親族の近藤筑前守が諸大夫を務めて居たし、すぐ近
くの江州栗太郡大石村は祖先の發祥地である。さうした色々の
理由から、山科を選んだものと思はれる。良雄が山科に住居し
てゐたのは一年餘りで、その間、京の島原祇園、伏見の樟木町
大阪の新町、奈良の木辻、大津の芝屋町と足の向き次第に流連
荒亡を續けてゐた。勿論片岡小野寺と云つた所を取巻きに連れ
て、女郎新造影間を追ひ廻し、喰ひ酔つてはそのまま、野道に伏
し、又對手を求めては喧嘩を賣つて歩いてゐた。従つてその間、
上杉家の隠し目付遠目付の類がそれに應じて要所々々に伏せら
れてゐた。京山科宇治木幡岨大阪奈良は申すに及ばず、遠く



良雄自作辨財天祠

第だから、山科に於ける村方一統も求が氣でなかつたと見えてそれとなく注意して警戒を怠らなかつた。今で云へば官権の壓迫と云ふやうなものも相當はれたらしく、その間を潜つて當時の正義派が盛んに活躍したのである。

請状の事

一、此度播州赤穂浪人大石内藏助儀は我等親類にて御座候につき我等方へ亡人に被成引越申候此者随成る者にて御座候萬一此内藏助儀につき何様の六ヶ敷儀出来候共我等罷出

吉野にまで及んでゐるこれは講談野史に出てゐるのではなく、當時の碩學室鳩巢の赤穂義人録に書かれてゐる事だから信じてい、事實であらう。

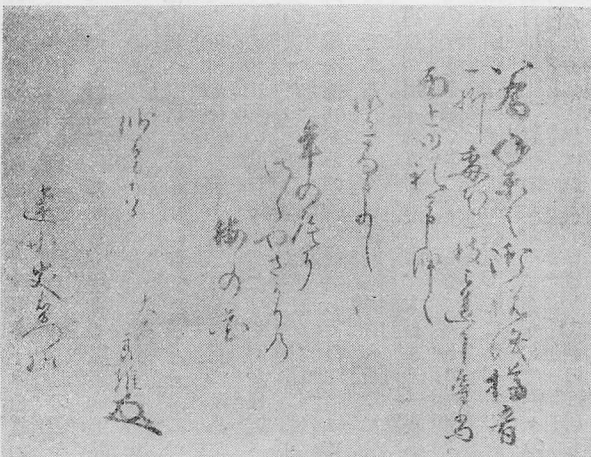
そんな次

こんな一札が残つてゐる所を考へてみても當時の状態が畧々察しられる。
山科閑居の材料はこれ位にしておいて次は大石村へ移る。
大石良雄の祖先是藤原秀郷でこれは瀬田の橋から三上山の蜈蚣を射たので名高い田原藤太秀郷の事である。

庄屋年寄衆

近藤源四郎(印)

大石良雄眞筆



近江の栗太庄は昔南都興福寺の所領だつた。興福寺は藤原氏の氏寺であるから、後になつて秀郷の領する所となつた。大石氏はそれ以來土着の名家で、良雄の曾祖父の代に淺野家へ仕官し淺野長友が常陸から播州へ國更へになつた時良雄は父の後を襲つて國老となつただから良雄の少年時代は一時大石村に住した事があるらしく、近邊には當時の傳説も残つてゐる。そして大石村字中と云ふ所には良雄舊宅の跡があり、今は一面の柵林になつてゐるが平面だけは残つてゐる。在所のお寺には良雄の遺物も藏してゐるし附近に大石城跡も残存してゐる。その他京都市内の大石史蹟としては祇園の万亭と瑞光院が尤も著名である万亭の方は衆知の通りだから茲では云はず、瑞光院は上京區堀川頭瑞光院前町にある。元淺野家の別荘であつたものを後菩提寺に直したもので、當時の第二世と淺野長矩の奥方瑤泉殿とは俗縁の間だつたので、長矩自及の後良雄がその衣冠を持ち歸つて茲の土地に埋めた。その後上野介を討取つた四十餘人が切腹した時、この寺から使僧を江戸へ送つて、四十餘人の遺骨遺髪を持歸つて、舊主長矩の塔の側へ埋めた。即ち京の義士寺とは茲の事である。

尙餘白があるから書いておくが、碁盤太平記の中で、由良之助が暫間未者を大勢引連れて雪の花道を自分ほ駕の中で居眠り乍ら戻つてくる。そして自分の女房を見忘れたやうなとほけた挨拶をする。

「これはよい御機嫌でござりまするな」
と云はれて

「お、機嫌ともく、昨夜から飲み續け、自作の歌に舞の手をつけ踊るやら騒ぐやら……」と云つてゐるが、事實良雄の作つた地歌が二三残つてゐる。

さとけしき

大石うき作

身をすつる、さとあればこそ浮む瀬のあるをたのみにうきつとめ、わたりくらべて名を流す、夜ごとにかはるはだくの實と嘘とをとひかけられて、かほにもみじする、誠ならねどあはねばうそよ、しんきのやるせなや、うらみられしも恨みし人も、ともにやれ、消えゆく春の雪、さだめないぞやさくらの花は、一しほ首尾のいろにあかさん

大石うき即ち通名浮大盡の由良さんの事であるが、この歌等良雄の心境をそれとなく暗示してゐて、彼が遊蕩に身を持崩してゐた當時には、果して仇打ちの志があつたか無かつたかを論議するの面に白い材料となるであらう。良雄が禪宗の篤信者であつた事とこの歌とを考へ合せると、實に色々の事が想像されるのである。

他にも二三松村小野寺等と合作した歌もあり、調子は何れも岸野治郎三、即ち料亭井筒の主人公が付けたものである。井筒は一力と共に祇園名代の大茶屋であつた。

近松門左衛門原作

碁盤太平記

一幕

山科閑居（おほむ石）

内蔵 コリヤ待てく

主税 父上此奴は敵の間者

内蔵 それをその方今知つたるか、犬となつて當家へ入り込み敵方へ内通すること身共は篤より存じて居るわい

主税 それを何故今日まで御成敗はなされませぬ

内蔵 此奴を討取るその時は、敵方にては向々用心きびしくなるは必定、そこを察して今日まで放心なせしは我苦肉謀ると知つてはかられしは反簡なりと知らざるか

主税 子として親の心も知らず血氣にはやりし此場の仕儀、面目次第もムリませぬ

内蔵 痛はり内蔵之助

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

ト内蔵之助岡平に腹帯をさせる

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

内蔵 岡平どの御身とて高家にて志ある人ならん、主君へ忠義を思へばこそ犬となつて當家へ入り込み、永らくの御苦勞、内蔵之助身に比べて推察申上ぐる、去りながら拙者とても何卒御主君の仇を報せんものと一味の者四十有餘人、親に離れ、子を殺し有り

の無筆と偽はり當家へ奉公、心をつくるその内に祇園墨染島原の花にたはむれ色と愛で性根腐つた大石殿内通なして門を開かせ向も様子を伺ふ處けふの苦節の一什始終御母堂の御折檻も柳に風の御心中聞者と知つて某へ是聞けかしの暴言に老たる母御を國へ歸し、二世の妻を離別されしは天晴れ金鐵忠義一途の良雄どの、誠の武士に當つた刃此高村が腰に帶せず、主君を偽はる我不忠、御身の忠義にくらぶれば我一命を捨てたと何惜むべき事の有るやワザト御子息主税殿に刺されし覺悟の逸平太、モウ師直の家來にあらず幸ひ内通の状毎に大石殿は腰拔武士敵を討つ所存なしと度々の通達、去るに就て最前玄伯より此通り用心の門を開き進歌、茶の湯花の會風流に世を送ると、サア油断は天の興へなり時少しも早く彼の地へ下り早々本望遂げられよ

内蔵 よくぞ御明し下された御心中を聞く上はせめて息ある内に館の案内を御語り下され

岡平 ム、く

主税 實に尤も、去りながら高村殿にもこの

深手

内藏 ヲ、幸ひなる碁盤是へ

ハハツと主税は心得て碁盤を前に引よ

せる

苦しうも見られよ此方より碁石を並べ圖を

作つて尋ねべし、合はばどうなづき合はざる

時は指をもつて引直せ

深手ながらも岡平は

岡平 主君に背きし浪人の口より洩らす館の

案内冥途の餓鬼申し上げん

内藏 天晴れく氣丈の魂、屋敷の塀は此

白石、黒は館と定むべし。此處は東門、石

一目を十間に作り

主税 並べし石數十四百四十間は皆塀か

岡平 それも堅固の高塀なり

内藏 折廻しに平長屋是を離れて泉水築山

岡平 爰があづまや彼所が茶屋

主税 シテく矢倉は

岡平 巽角

内藏 支關は爰侍部屋は南か北か、爰ぞ正

しく速侍廣間は是より是迄か、奥の廳所

は爰かかしこか、それぞ即ち長廊下

主税 三方に取り廻し、馬屋は西か武具の庫

は東なるか北なるか、北は空地か

ハ碁盤の目明いてもふさがる手負ひ

内藏 御案内を便りとなし、本望遂ぐる時有

らば功名の一番筆

主税 それを冥土の土産とし心残さず成佛せ

られよ

内藏 あつぱれ武士を

主税 傾て冥土で

三人

再會く

ハやがて手向の露と顔を見合はせて悲

歎の涙にくれにけり

岡平 落入る

布圍をきせて屏風のかげへ隠す

主税は柳行李お持ち來り兩人し

て旅装をなす

此時庭前より母お石出る

お石は母を痛はり武重へ上げて

その身は燈籠のかげにかくれて

居る。主税お石を見るお石、燈

籠の火を消す

主税 ク、祖母様何時の間に

ハといふを打消す

内藏 たわけの俸、何を申す、此内藏助やそ

の方には最早、この世に親はない筈、こり

や跡に心の残るやうでは大事のお役目が怠

るぞよそこへ心の付かざるか狼狽者めが

ハ叱られて建切る障子一ト言の詞も出

でず、突ツかくる胸は涙にとぢられ

て内は用意の旅支度、影に名残りの

母の聲

母親 内藏助は我子なれど勸當したれば此世

で訓かわさぬがこの母は一ト言云はねばな

らぬ、左程の心を露と知らず、最前の言ひ

たい許して下され影の人

ハ半涙に氣も消へて泣き入る傍にお石

はたまらず

お石 そのおわびは母様より私がせねばなり

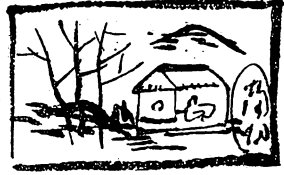
ませぬ、コレ内藏助イヤサ障子にうつる影

のお人、幽遠間し女ぢやとお思ひなされ

たて御座りませうが、人目を偽わるお心と

は知らず悪口申しましたお赦しなされてく

ださりませ



土蜘蛛と紅葉狩

高原慶三

ひるの「土蜘蛛」と、よるの「紅葉狩」はこんどの顔見世のふしぎな対照——

「土蜘蛛」は「新古今演劇十種」にして音羽屋畑、その直系の尾上梅幸演ずるところ、

「紅葉狩」は「新歌舞伎十八番」にして成田家畑、その傍系の松本幸四郎演ずるところ、

「土蜘蛛」は明治十四年新富座「紅葉狩」は明治廿年十月新富座初演にて共に作詞は河竹黙阿彌である。

「土蜘蛛」「紅葉狩」共に出づるところは能より脱化したとはいへ「土蜘蛛」は宛ら能そのまゝにて「能七劇三」の割合との世評あり「紅葉狩」は能を全然脱却して「劇七能三」の割合ともいひ得やうか。

由來高尚癖ありといはれた團十郎畑の「紅葉狩」が能より歌

舞伎味を多分に、粹生肌の菊五郎畑の「土蜘蛛」が歌舞伎より能臭に勝れる、いとも皮肉なる対照といふべきである。

「土蜘蛛」は能にては季は七月、初秋、病君に仕ふる宿直の武士煎薬を献ずる侍女、怪しげなる學僧の變現いづれも夜長の景勝である。

「紅葉狩」は能にては季は十月、晩秋時局谷、ゆきくれし山路にいと美しき女蕩の林間紅葉を焼いて酒を暖む景勝これも俳句ならずんば何であらう。

田村成義翁の「續く歌舞伎年代記」には「土蜘蛛」上演に際し菊五郎はかの千筋の糸を繰出す傳授につき能樂師間と確執あり某貴顯の斡旋にてやうやくにして金剛唯一より口傳せらる。その間菊五郎の慘憺たる藝道の苦心談を傳ふ。

ひとしく「紅葉狩」にも團十郎が苦心談を同書は傳ふ、時恰

も團十郎が振付師花柳壽輔と好からず、門弟市川金太郎（現在の松本幸四郎）の父藤間勘右衛門に振付させやうとした事よりモメ事となつて壽輔は振付を辭退し、團十郎もそれかといつて藤間にやらせるのも工合悪く、遂ひに團十郎自ら振付したといふのである。

そうした藤間家に多少因由のある「紅葉狩」を現在藤間の家元である松本幸四郎が演ずるのも不思議な因縁である。

また「土蜘蛛」は明治十年、三代目菊五郎の卅三回追善狂言でその時「祖父の恩」といへる美本を孫たる五代目菊五郎が上梓してひろく世に頒つたといふ因由がある。即ち現在の梅幸にとつては「曾祖父の恩」でなくてはならぬ。

世はうつりかわつた。けれども幸四郎にとつては「紅葉狩」は永久に師匠と、父を追慕し、梅幸にとつては「土蜘蛛」は曾祖父と、父を追慕する事に何の變りがあらうぞ。



進調函粧化用答贈御暮歳

ルービヒサア

ンロトシンボリ 料飲涼漬

社合式株酒麥本日大

土蜘蛛に就て

遠藤道春

土蜘蛛は明治十四年六月新角座に於て、三代目尾上菊五郎三十三回忌の追善に、河井黙阿彌が筆を執つて五代目菊五郎の爲に書下した、能仕立の所作事で五代目菊五郎は、市川家の勸進帳に匹敵する能仕立の所作事を渴望すること久しかつたのであります、それよりこゝに實現されたのであります。

随つてこれが上演に當つて五代目菊五郎の苦心努力は一方ならぬもので、當時俳優輩は到底、本行を覗ふことすら出来なかつたのを某貴顯の傳手を求めて、熱覺會得し、稀有の好評を博し、新古演劇十種の内と銘を打つた、尾上家の秘藝であります。振付は花柳壽輔、長唄ふし付は杵屋正次郎で、當時の配役は、獸山の僧智籌、實は土蜘蛛の精(尾上菊五郎) 源頼光(坂東家橋) 平井保昌(市川左團次) 四天王が(小團次、松助、門藏、鶴助) 侍女胡蝶は(尾上菊之助) ツナキの狂言は(團十郎) が兵卒軍内(團右衛門)の同兵作、(鶴藏) が同番手で出て居ります、當時の番附の口上を拜察して見ますと、

御區中様益御機嫌克被遊御座恐悅至極に奉存候隨而私祖父三代目尾上菊五郎儀當年三十三回忌相當には何がな御慰に相成候追善狂言可相勤候重立候作本打寄り相談いたし候折柄去る芝居好事の御方様より古くは享和四甲子年河原崎座願見世に曾祖尾上松録葛城山の土蜘蛛の精を相勤め古今稀なる大入をなしたり近くは三代目菊五郎弘化二乙巳年中村座願見世と同じく土蜘蛛の精を勤め其頃大評判を取りたり斯く二代迄勤めし事故今般の追善に土蜘蛛を相勤候様難有御差圖に預り候へども中々未熟の業に難及候故達而辭退仕候を再應の御す、め難默止則ち仰せにまかせ長唄はやし連中にて所作事を取仕組奉入御覽候間何卒御最貞を以て祖父へ追善と思し召れ御評判よろしく御見物に御來車の程偏に奉希上候

五代目 尾上菊五郎

而して、市中の評判も極て好評で、此土蜘蛛の能仕立所作事に端を發して、團十郎の爲にも黙阿彌が執筆して、豹狐、紅葉狩などの所作事を書下したことは、黙阿彌集にも見えてゐます。

五代目菊五郎は、明治十九年十一月に、久松町千歳座で二度目の上演をしたのであります、そのときは頼光は書下し通り家橋で、平井保昌は中村芝翫が演じ、三度目は明治三十三年の五月、歌舞伎座で、頼光は、福助（今の歌右衛門）平井保昌は、八百藏（今の中車）東京では以上、三回の上演であります。五代目菊五郎歿後は、當然の順序として、梅幸、六代目菊五郎に依て此妙技が踏襲されてゐます。

梅幸が、之を初演したのは明治三十八年の五月で、實に五代目菊五郎三回忌の追善興行で頼光は羽左衛門で、この羽左衛門は五代目書下しのときには太刀持に出てゐたのであります、平井保昌、八百藏で、五代目最後の上演に、勤めました。

梅幸初役にて土蜘蛛を演ずるに就ては、努力苦心おさく、先代に劣らぬものであります、小生は親しく、此苦心を見もし聞かされたのであります、まだ、其時代でも本行の人が、俳優に秘傳を傳へるといふことは、よし本行にそといふ有志の人が有つても、其社會では許されなかつたと思はれて、梅幸も、其點に就てはかなりの苦心を拂つたものであります、幸に某氏が親切にそれを傳へられたので、先代の型を崩さない程度に、執り用ひた個所も尠くないのであります。

大體は觀世に基き、拵は着流しに法師頭巾であります、先代は此觀世と金剛の沙門頭巾に大口の拵とを一日替りに用ひたのであります、梅幸も市村座で上演の際は、金剛の拵によつたこ

ともありますが、今日では殆ど前者の拵に決定されたのであります、後ジテは、塚の内々先代は合引にかけてゐたのであります、梅幸は、座してゐます、これも本行に依つたのであります、千筋の糸は梅幸に至つて、大成されたもので、先代のは長さ四間程で太いものであつたのを、極く細くして長さも八間に餘る程の用ひます、これは門弟の製作によるものであります、著しい相違は、頼光に一太刀切らせて、失せてけりの引込

に、花道の附際で、トンボ返りをしたことで、先代は、全然用ひなかつたものであります、これも本行から執り用ひたので、初演の折女形の梅幸がこのトンボ返りの稽古だけでも中々容易な努力ではなかつたのであります、初演當時の意氣込は此一事でも如何に盛んであつたかどうかはれませんが、さて其初演の初日の出来榮は如何かといふと、實に無類の傑作で、第一に、花道の揚幕を上げて出た處、既に鬼氣人に迫るの感があつて、味充分、決して先代に譲らないものであつたのであります、語りのうち個所々に先代を髣髴せしむる處尠からず遂に、梅幸の屈指の傑作として、今日に至る迄上場されること千餘回を數ふるに至つたのであります。斯様に、先考の妙技も、梅幸、菊五郎の二遺子に依て、舞臺に光彩を放つてゐることは地下の五代目も嗚かし満足なことであらうと思ひますのであります。序ながら、此土蜘蛛と、茨木の二つは、尾上宗家の板權に屬して宗家以外の上演を許されないものになつてゐます。(完)



紅葉

狩

河竹繁俊

京都南座の吉例顔見世狂言(?)に、「紅葉狩」が上演されるといふので、一般の讀者諸君のために少しばかり書きつけて見る

言ふまでもなく、「紅葉狩」といふ所作事は、明治年代に生れたもの、中での大物であります。新歌舞伎十八番の内にかぞへられてをり、九世團十郎の圓熟期を代表し、その演出にかゝる舞踊です。

初演されたのは明治二十年の十月、東京新富座に於てでありました。竹本、長唄、常磐津の掛合といふ大がかりなものであります。

原材は謡曲に仰いだもので、謡曲に出發した所作事としては

上の部に屬してゐると言はれてゐます。

「船辨慶」や「土蜘蛛」よりもこなれてゐると言つてよいと思ひます。

書きおろしの時には、更科姫實は戸隠山の鬼女は九世市川團十郎、餘伍將軍平惟茂が先代市川左團次、山神を先代の中村芝翫が勤め、いづれも大喝采を博しました。

この時以來、芝居に、おさらひに、盛んに繰返され、今日に及んでゐます。

作者は黙阿彌で、七十二歳の時の執筆です、臺本ができて本讀みをした時、更科姫に扮する團十郎がその終つた時、更科姫の踊りの間が少し短かいやうに思ふ」と言ふに對し、黙阿彌はおもむろに、懷中の疊紙から別に淨瑠璃の文句だけを書いた紙

片を取りだし、或ひはあなたからさういふお説が出るかと思つて、長めに書いたのも用意して來ましたと言つて、更科姫の舞の件の淨瑠璃を補足して讀んで聞かした。

團十郎もそれを聞いて、コレデすつとよろしくなりましたと感心し、同時に作者の用意周到なのにも感服したといふ逸話がこのされてゐます。

○

こんどの興行にも、松本幸四郎丈が行かれるといふ噂を聞きましたが、多分更科姫實は鬼女の役——即ち八代目書きおろしの役は、同優によつて演出せられるものと想像します。

わたくしも同優の「紅葉狩」は何度も舞臺の上に拜見しましたが、セリフといふ難物が少ないだけに、大變結構だといふ極め附きであることは言ふまでもありません。

なくなつた養母が、何かの話の時に申したのをおほえてゐます——

「高麗さんが、更科姫で「マロウド暫し待ちたまへ——」といふセリフが、ほんとうの女形のやうで、よくもあんな柔しい聲が出たものだと思ひました。」といつた言葉を。

「高麗さん」といつたのは、すなはち今の幸四郎丈で、その頃市川高麗藏と呼ばれてゐたからです。

(五、十一、二十五)

大野醫學博士 實験推選
乳兒に一番良
パ—オムイ
松竹石煥

能から生れた

『土蜘蛛』と『紅葉狩』

森 ぼ の ぼ

「土蜘蛛」は明治十四年六月、黙阿彌六十六歳の作だといふからざつと五十年前のことです。其頃の劇壇には、新時代の好尚に適應した「活歴」と呼ぶ新時代物「散切り」と呼ぶ新世話物が迎へられてゐました。さうした動きのある時に當つて、能樂を模倣した新形式の典雅な新所作事が出現したことは、決して偶然ではありません。

この新舞踊劇は「能七分芝居三分」と言はれた程。能曲「土蜘蛛」をそのまゝ、移植したに過ぎませんが、それだけ當時の趣味には投じたわけです。尤もこれ以前、能から暗示を得て作られた浄瑠璃所作事、顔見世狂言はあつたので、この新舞踊が上場された時の口上看板にも、古くは尾上松緑（五代目菊五郎の曾祖父）近くは祖父三代目の梅壽菊五郎が演じてゐることを述べてあり、此狂言も三代目の三十三回忌追善と銘を打ました。この作が好評であつたことは、同じく能模様或は狂言風の舞

踊劇「釣孤」「望月」「釣女」「茨木」「船辨慶」等が作られる動機となつたので知れます。五代目は此を「茨木」「戻り橋」と一緒に所謂新古演劇十種の最初に置きました。尙、明治二十年四月井上邸に皇后陛下行啓の砌は上覧の光榮に浴したのです。

「土蜘蛛」が團十郎の十八番「勸進帳」に對抗して作られたものであることは言ふまでもありませんが、頼光と僧智壽との間の大明王の問答の吸きも例の山伏問答に倣つたものです。併し現今は、この件を始め、大分處々刈込んで演出してゐます。それが爲、愈々本行に近いものになつた譯です。

蜘蛛の精が斬られてから花道の引込で、片膝を突き、片袖で顔を隠したあの形も、能の型から暗示を得たものですが、能の引込にはまだ面白い型があります。それは替の型で「入れ違ひ

の傳」と言ふのですが……いつもならばシテが幕へ駈け込むのを「形は消えて」で一旦、後見座へくつろぎます。と、ワキの獨武者が出て來るので、シテは立上つて橋懸りへ行きます。二人がすれ違ふと、ワキは足を留めて振返るので、いきなりシテは翼を一つ投げ懸けます。そして、ワキが刀へ手を懸ける時、シテは揚幕へ駈込んで、姿を消してしまふのです。これは派手な型だけに、シバキの方へ探り込んで面白からうと思ひます。

×

能の「紅葉狩」は「土蜘蛛」と同様に觀世、寶生、金剛、金春、喜多の五流を通じてあるもので、謂はゞ一般的な、大衆的な作品です。作者は超人、世阿彌とも、その甥の小次郎信光とも言はれてゐます。(信光は「安宅」「船辨慶」の作者)

芝居の「紅葉狩」は明治二十年十月、默阿彌が團十郎の爲に書卸したもので、前作の「土蜘蛛」や「茨木」「船辨慶」等のやうに能の様式を踏襲せず、音楽も常盤津、竹本、長唄の所謂三方掛合衣裳も道具も全く歌舞伎仕立てで、能から暗示を得ても、能からは全く禪脱してゐる點に作の一轉機が認められます。

原作が抒情詩風で佳いものだからでありませうが、新舞踊劇化されたシバキも亦別な意味で面白く、新歌舞伎十八番中에서도傑出してゐます。それは一つは、團十郎自身が創作した巧妙な振附にも負ふ所は多からうと思はれます。

×

新富座初演當時の役割を見ると、腰元五人の中に、澤村源之助と市川金太郎(今の幸四郎)の名があるのは嬉しいことです。能の方でもツレは三人か五人ですが「鬼揃ひ」といふ小書が附くと、後になつてから、このツレがいづれもシテと同様な拵へ——赤頭、法被、半切——で揚幕を出て、橋懸へ並びます。(ワキにシテが切られると、橋懸から揚幕へ逃けて這入る。)それから舞、働なる一種の所作などあつて、至つて華やかなものです。これも歌舞伎の方へ移入して面白いと思ひます。

×

山神は近頃は、輕快な小兒の拵へですが、書卸しには戸隠山神の翁とあつて、老體の神です。これは芝翫(歌右衛門の父)に嵌めた役だからでせう。故人段四郎が演じた時も、同じ意味で老體の拵へでした。併し、純真な、活々としたあの小兒姿である間の早い踊を見るのは愉快です。

能では間狂言として勤めるので、八幡宮の末社、武内の神で靈劍を持つて出て、これを維茂に授けます。拵へは老體です。

×

初演の折、前述の役の外に、先代左團次が維茂です。同優は「土蜘蛛」で平井保昌「船辨慶」で辨慶「戻り橋」「茨木」で渡邊の綱といふやうに、いつもワキ役として堂々たる演技を見せました。以上の如き新舞踊の成功もこの優に負ふ所が尠くない。現今の左團次幸四郎の二氏も決して遜色の無いのを悦びます。

所作

土

蜘蛛

一場

(おほむ石)

俄に地中鳴動なし、四方へ懸けし蜘蛛の圍より火焔を放ち、水を吹き、さもおそろしき有り様も、事ともなきて大ぜいが、忽ち崩す古墳の岩間の影より、土蜘蛛の鬼神の靈あらはれたり

軍兵四人立かゝる
蜘蛛の巢の左右を破り絲を打懸る
これにてドロくになり軍兵目くるめきし思入れにて、前の二人タヂくと左右へ見事に返る
是と一所に正面の巢を引き破り土蜘蛛の精黒頭唐織色なしの着附錦の法被紺地金もやらの半切錦打、杖を持ち出で
見得



敵山の僧智等
土蜘蛛の精

梅吉

我れを知らずやその昔、葛城山に年經りし土蜘蛛の精魂なり

保昌 扱こそ怪しき鬼女の變化そもく汝は
五人左右より詰かける
つみ唄になり

土蜘蛛

軍卒二人懸るをつきのけきつと見得
此日の本に天照す伊勢の神風吹かざれ

我が眷族の蜘蛛むらがり六十餘州に葉を張りてとくに覺界になさんもの
思ひし望み叶はねば、先づ頼光を備まさんと障化をなせしかひもなく
我命魂を斷たんとや
此内打杖を持軍卒を遣ひよるし

保昌 普天の下卒土の賓、王地にあらざる所

公時 忽ち天罰、その身に報ひ
貞光 劍に當つて惱むのみか
季武 命魂斷も自業自得
保昌 とくく變化を討取候へ
四人 心得て候

土蜘蛛 ヤア、われを討たんなんぞとは小さか
しき者共よ、蟲類何ぞ千歳の年經りし蜘蛛の
通力自在、見よく今におのれが五體へ千

筋の糸をくり掛け手足を包み動かさじ
保昌 たとへいかなる通力あるとも何條討得ぬ

四人 事あらん

土蜘蛛

いで命魂を斷つてくれん

蜘蛛の精靈探溜し千筋の糸を左右の
投げかけく白糸の手足にまつわり五



土蜘蛛の孫

梅吉千

體を包めば、流石の保昌四天王等も
自由に動く事叶わず

鳴物にて蜘蛛打杖四天王は太刀

を抜切つてかゝる

立廻りの内土蜘蛛千筋の糸をたび

く 打かけツカくと花道へ行

天婦ら

壽司

小鉢

京南座東隣

南座東別館
(二階三階食堂)

鮮 倉 矢

店 支 屋 滿 志

番 五 五 五 二 } 祇 電



『鶯娘』と『戻駕』

倉田啓明

私に課せられた問題は、「鶯娘」と「戻駕」——ふたつながら日本の古典舞踊の中では、有数の地位を占めるものである。舞踊の講義をするほど、斯道に對して博識でない私には、少し見當はずれの御注文と思ふが、とにかく知つてゐるだけのこと書いて、覺束ない手引草としやう。

「鶯娘」の印象

顔見世では梅幸の「鶯娘」だそうだが、これは稀らしい。私のときはまだ梅幸の「鶯娘」を、これまで見たことがないのだから、非常な珍品である。

私が見た「鶯娘」は菊五郎と、東京の福助のだけだ。然しこの古典舞踊は、私の甚だ好きなもの、一つで、約言すれば「凄艶」の二字に盡きる。

そして日本の舞踊で、かくまでに單純にして凄艶で、しかも

色彩美の優れたものは他に恐らくなからうとおもふ。舞臺はまさに鈴木春信の浮世繪である。見てゐると眞に「妄執の雲晴れ……」る心地がする。詞曲として最も凄艶なものは、私は河東節の「水調子」を推すが、舞踊としては勿論この「鶯娘」の右に出るものはない。

六代目がこの間帝劇で演じた時には、彼の新工夫で幕明きに舞臺を暗黒にしたさうだが、さうした照明の技巧は、かやうなクラシツクの舞踊には禁物である。梅幸今回の演出は、やはり古格を保つて、あざとい新演出などの試みのないことを希望したい。

先年市村座で、六代目が演じた時、私の見物席の隣に若い外國人がゐて、熱心に舞臺を見つめてゐるから、「君にあの日本舞踊はわかりませんか。」

と、尋ねたことがあつた。

するとその外人はあまり流暢でない英語で、(佛蘭西人だとあとでわかつた)

「面白い。大變に美しい。日本の浮世繪そのまゝです。」

と答へた。

私はなるほどと思つた。浮世繪に興味をもつ外國人にも、たしかに「鶯娘」の美しさはわかるのである。

何にしても本年の顔見世では、梅幸の「鶯娘」は呼物の一つとして、期待していゝとおもふ。

「尻駕」の由来

長三郎と勘彌が次郎作と與四郎に、扇雀か禿といふ役割の「尻駕」。

千鳥の香爐に絡んで、駕昇に化けた石川五右衛門と太閤さんが踊るんだから、とても奇抜な趣向だ。

然しそんな詮義立は無用として、これが由来をたづねれば、天明八年中村座の顔見世に、初代中村仲藏と四代目松本幸四郎等が演じた。初代櫻田治助作、鳥羽屋里長作曲、西川扇藏振附の「尻駕色相肩」である。

もつともこの趣向は元禄十一年二月、京の山下半左衛門座で江戸役者の中村七三郎の演じた有名な、「傾城淺間獄」の狂言中にあるが、なんでも作者の治助は、何處かで駕籠の中から濃

艶な振袖の垂れ下つてゐるのを見て、そこに暗示を得て書き卸したものださうだ。原曲は、

「新玉の年の三年を待ちわびて、待たる、顔を持つ顔を……といふ置淨瑠璃の文句にはじまるので、これは大阪から三年振で戻つて来た、仲藏と幸四郎の顔合せを利かしたのだが、今では、

「古をこゝにうつしてわざをぎの……」

と改められてゐる。

所は洛北紫野の春、櫻や菜の花が眞盛りだ、そこへ四手駕籠をおろした二人の駕昇が、長閑な春色をながめながら、煙管の振事と江戸と大阪のお國自慢から、禿を呼び出しての廓ばなし、さては丹前六法の振事。

「禿々」と澤山さうに……

と、禿のあどけない踊、地廻節から互に落す連判狀に、千鳥の香爐の奪ひ合、とど禿と三人立の總踊、三下り唄に大拍子の合方で、京とは似ても似つかぬ江戸情調が漲る。

この仲藏の「尻駕」以後、同じ治助の作で「姿花鳥居色彩」といふのが、五代目岩井半四郎と三代目瀬川菊之丞で演じてゐるのが、「女尻駕」のはじまりで、その後いろいろの作があらはれてゐるが、大抵同じやうな趣向である。

所作

紅葉狩

一場

(おほむ石)

常々秋の最中も疾く過て岸の柳の葉は散れど

竹々山路は昔のなめらかに
唄々線に茂る松柏の木の間に
時をしりかほに紅葉色増す
村時雨く

ト、更科振あつて扇を
持ち前へ出て

常々其名所は取分きて都に多く
通天の

竹々山を望めば山姫の手に織
りなすかから錦

唄々秋の山アに日の入つて入
合告ぐる遠近の里に暮るゝ
恨みの山

常々はゝその森や木の蔭の小倉の山の



更科姫

おほむ石

風景は
竹々外にたぐいも嵐山
常々風に散りて紅の

唄々水を染めなす大井川
竹々しばしまどろむ維茂が透を伺ひ立

寄りしが

ト、此内更科扇を遣ひよろしく
振り、維茂は首を傾け居眠る、
更科是を見てツカくと傍へ行
き氣を替へて

唄々月日も早くたつ霧に春ならぬ共遠
山の麓に露む公川の

常々流れの元はいづくとも誰白菊の咲
き亂れ

唄々涙みて香を知る菜水
ト、更科振あり、維茂又眠る更
科傍へ行く恐れる思入にて後へ
下る

望月
維茂さまには、まどろまれしか
コレ

唄々夢ばしきまし給ふなと暮の内へぞ
入りにける

ト、更科、維茂目をつけ、侍女
腰元を連れて幕の内へ入る

竹々時しも空は暮引いて雨打ちそゝぐ
夜嵐の物すさまじき山陰に鳴動なし

て山神の假に姿をあらはせり
ト、どうくと跡への鳴物にな

り向ふより芝術師の頭巾美形なる山神の拵へにて丸木の杖を突て出て來り直に舞臺へ來て

鬼神が夜な〜人を取り
常へ生血を吸ふて肉を喰ひむしやりむしやりと骨迄もかみ割る事の恐ろしや

竹へ御身も爰に長居せば必ず鬼の餌じきとならん、疾く起きて參られよ、

我は八幡大神の命を蒙り來りしなり
常へ疾く起きよ〜と杖突きならし起しける

ト、此内芝術師おかしみの振りあつて杖を突き起す

維茂、八内、連平やはり眠りおる常へ熟醉なして主従共起さる景色のあらざれば

よし〜足拍子を踏みならし音にて目をば

覺し呉れん
唄へ神すゞしめの夜神樂も岩戸神樂の名残りにて

常へた〜太鼓に笛鼓、土拍子打てどんがらこ

唄へどこどん
竹へぼんぼこ

常へひいどんちやん
唄へ打てど叩けど目覺めねば

常へ山神あきれて杖を突き後をも見ず
に歸りける

竹へ一トふききつと
ト、此内芝術師よろしく振あつて

拍子を踏と目の覺めぬにあきれ
向ふへは入る、はけしき風の音になり

維茂 アラ淺間しい我ながら無明の酒に熟醉
なしまどろひ内に夢の告げ扱ては變化であつたるか

ト、あたりへ思入あつて
今迄ありし女性の姿爰に見へぬはいぶかし

ト正八幡のお告げといひ正しく鬼神に疑ひ
なしイデ正體見とゞけくれん

常へ勢ひ込んで幕張りの内を目掛けて
見入れば

竹へ後に二人は起き上り

お素人催し演劇

舞臺及照明装置請負

照明用器具賃貸ニ應ズ

臨時照明部員求ニ應ズ

大阪市千日前南地ビル

關東電氣商工社内

舞臺照明協會

電話戎(五四六四番
二三〇九番

所作

鷺

娘

一幕

(おほむ石)

鼓唄 長唄になり、鶯娘出て踊る
唄 哀婉の雲暗れやらぬ朧夜の戀に迷
ひし我心

三下り 忍ぶ山口舌のたねの戀風が
吹けども傘に雪もつて積る思ひは淡
雪の消えてはかなき戀ちとや

思ひ重なる肺のやみ
せめて哀れと夕暮にちら／＼雪に濡
れ鶯のしよんぼりとかあいらし

迷ふ心のほそ流れ、ちよろ／＼水の
一ト筋に

怨みのほかは白鷺の水になれたる足
取りも濡れて雫と消ゆる物

我は涙にかわくまも袖干あへぬ月影
に忍ぶその夜の咄を捨て、

縁を結ぶの神さんに取り上げられし

嬉しさも餘る色香のはづかしや
須磨の浦へて汐波むよりも、君の心
は汲みにくい、去りとは實にまこと
と思はんせ

縋子の袴のひだ取るよりも主の心が
取りにくい、去りとは實に誠と思は
んせ、しやほんにへ

白鷺の羽風に雪の散りて花のちりし

景色と見れどあたらし眺めの雪ぞちり
なん

雪ぞちりなん

憎からぬ

鼓唄 戀に心もうつろひし、花の吹雲の
散りかゝり拂ふも惜しき

袖笠や

傘をさすならばてん／＼日照傘

それへ／＼さしかけていざさらば、
花見にごんせ吉野山

それへ／＼香ひ櫻の花笠

縁と月日を回り來る／＼

車傘それ／＼さうぢや

それが浮名のはしとなる

添ふもそれはずあまつさへ邪見の刃
にさき立ちて此世からさへ劍の山、
一じゆの内に恐ろしや地獄の有様こ
と／＼、罪を糺して閻王の鐵杖正
にあり／＼と等活畜生衆生地獄或は
叫喚大叫喚修羅の太鼓は鬧もなく

獄卒四方に群がりて鐵杖振上げ鐵
の牙噛みならしほつ立

二六時中がその間くるり

くるり追廻、／＼終に此身はひしひ
しく

あはれみ給へ我愛身語も涙なりけ
らし

トよろしく振事あつて

幕

所作

戻り籠

一幕

(おほむ石)

〽月つきままちち日ひままちち臺たい町ちやうににごござざるる法ほ院いん線せんの

ままももりりおおふふだだややううららややささんんよよくくああひひ

性せいもも木も性せいとと火か性せい吸あつつけけ煙えん草そうのの火か皿びんささ

へへ、てつつぽぽうう店てんののききささんんじじはは短たんきき夜や

半はんををききりり〽す枕まくらもも上う草そう履り、浮氣き同どう

士しののああだだくくらら〽廻ららばば廻まれれ女め氣きのの口くち

説せせせぬぬ日ひもも茶ちや碗わん酒しゆ〽ハばばかかららししいいちち

ややなないいかかいいなな

次つぎ郎らう作さく 〽アななるるほほどどききつついいももののだだ、イヤヤ、又又また

新しん町ちやうののああげげ屋やとといいふふはは別べつななももののよよ、太夫たふ天てん

神しん引いん舟ふねかかここひひ、かぎぎりりのの太たい鼓こをを打うつつままでではは

んんををひひややううししたたりり

〽九品ほんのの淨じやう土どのの九く軒けん町ちやうひひややううたたんん町ちやうの

名なにに名なににううかかむむ、彌陀だののししごごちちつつ

ききぶぶししのの唄うた三さん味みせんせんのの音ね樂がくにに、虚空こくう

にに花はなををふふららせせつつ、歌舞まわのの菩ぼ薩さつのの揚やう屋え

入いり

〽戀ののややままくくちち名なもも高たか崎さきやや色いろのの世せ界かいに

住すま吉きちやや通とほひひななれれたたるる新しん町ちやうのの井い筒づつににか

けけしし大だい和わ屋やゆゆかかりりのの桶づつのの井い筒づつににか

酒しゆにに底ぞこななしし、盃もも金かねににはは受うけけぬぬ横よこ町ちやう

ののどどううじじをを開ひらけけばば茨いば木き屋や手てををみみや

ととちちどどりりああししききややううすすどどんんじじややううな

しし手てななしし、のくくせせととししてて悪わるじじややれれい

ふふたたかか大だい通とほ衆しゆででははああるるままいいかか、どう

いいふふ理り風ふうかか氣きががししれれぬぬとと太た夫ふががここ、

ろろををひひいいたたれればば、そここででききややつつめめも

むむつつととししてて、コレレ〽此むむここづづくくし

ををととつつたたににほほううかかららななききだだぐぐみみそそつ

ももやや何なにのの事ことぢぢややいいなな、わたたししややおおま

へへにに打うちちここんんでで身みをを盡じんしたたるる浪なみ華は瀧たき

梅うめよよりり粹すいなな殿とんぶぶりりにに、だままさされれててき

〽空のの間ま晝ひるもも屏びん風ふうのの冬ふゆ籠かごりり、抱いて



周の春・目の正月

藤井紫影

周の春といはれた顔見世の時節が早くもやつて来て、例年の通り東西の名優が四條の芝居にズラリと顔を揃へて、十八番の出し物に得意の腕を揮ふとあるからには、何は措いても目の正月をさせねばなるまい。

さて狂言の数々は新古硬軟とりまぜて並びも並んだり、秋の唐錦、紅葉狩にはや、遅く驚娘の雪にはちと早く、正に是時雨の炬燵時とて土蜘蛛のこもりもあへず、山科の閑居を出で、

……ア、面倒だ、こんな古臭い文句はもうやめた。

東京は忠臣蔵全盛であつたが、こちらは碁盤太平記的一幕だけとは却てゆかしい、それに役割がよいから屹度面白からうと思ふ、先年忠臣蔵の山科で梅幸のお石と中車の本蔵を見たが、今年は幸四郎の岡平に特に興味をひく。

時雨の炬燵は大阪二人東京三人の顔合せだか、ネチ／＼した上方の世話狂言に東京方がどの位まで調子を合せてゆけるか

見ものである。これも先年中車が河庄内の孫右衛門で、あざやかな大阪言葉を使つて、意想外に感心させられたが、その時河庄の女房になつた梅幸はホンのおつきあひではあつたが、どうも江戸から出張といふ感じが強くて、しつくり調和しなかつた今度のおさんはどうであらうか、此點が關心でもあり好奇心を喚ぶ、福助の小春も初めてであらう、これも同様に注目にする。

珍らしく勘彌と齋三郎が加はつて、新しい芝居を見せてくれるのは誠に嬉しい。今後も此用意を忘れぬやうにしてほしいものだ。

X

この他舞踊劇の土蜘蛛、紅葉狩、驚娘等の折紙付定評あるものは、改めて讃辭を呈するは却て失敬であらう。



顔見世月の二王座

鴈治郎と曾我廼家五郎

富田泰彦

明日へのかすかな希望をつないで人々は喘いでゐる——而して蓄積された「偉大な過去」を精算もせずに遺棄しようとしてゐます。

これは管に劇壇のみに申する言葉ではないが、汝の運命は、汝の胸にありで、敢へて私は退嬰的な卑屈な考えを強うるものではありませんが、今、我々國民が尊重して可い古典藝術が一つ一つ滅却——若しく崩壊作用を起しつゝある。歌舞伎もこの危機にあることは勿論です。

「道頓堀」の編輯者が私に求められたものは「顔見世と鴈治郎」と云ふのです。「偉大な過去」を検討するには、最も相應はしい題材ではありませんか、——だがこの師走めがけての、さうした長談義は、甚だ氣が利かない。況して顔見世に就ても、私の鴈治郎禮讃に於ても、既に貧しい辭が盡きて終つて居ます。實際私の鴈治郎に呼びかける聲は、本誌の愛讀者達には、判りず

ぎるほどに、判つて頂いてゐるものと信じてゐます。

いつぞや云つた鴈次郎の藝術を、太陽に譬へた如く、「未だ日が高い」うちに、光輝ある様々の美しい影を見て置かうでないか——この太陽が聴て没しることのある場合——勿論未だ未だ遠いことを希つてはるながらも——この後に來る暗澹晦暝なすがたを想像して見たいけれども卒然たらざるを得ません。

顔見世月と鴈治郎を思ふ時、私は曾我廼家五郎をいつも聯想します。この兩優の行動はこゝ十數年來、——それは星座の運行のやうに、京南座へ、大阪中座へと現はれてゐます。歌舞伎劇壇の王座を占むる鴈治郎、喜劇界の權威たる五郎、しかもこの兩名優はともに大阪が生んだ誇るべき藝術家なのです。

この他の相似點を拾つて行けば、ともに不斷の努力を吝ま

に、この地位を確保してゐる事、専政主義的な一座の統制力、
——この舞臺の吸呼までが共通してゐる處があります。

大凡偉大な藝術品は、この過去に於て精算された聲價なので
す。レピンティシオンはこの勞作の反映なのです。名優鴈治郎
を生んだのは今日ではありません。喜劇王五郎を迎へたのは、
いつだつたか考へて御覽なさい。この如何に久しいかの人氣を
占めてゐる兩君の存在は、決して奇蹟でもありません。一日
と「偉大な過去」を蓄積して行く力、投機的な聲價でない——
謂はゞ勤儉力行的な舞臺への精進、玩辭樓十二曲を始め數々の
當り藝「曾我廼家五郎全集」に飽滿するほどの名脚本のオーナ
ーシツプ!! 實際貧乏擔ぎもしない筈です。

——これは大衆的な支持がなくてはならないが、鴈治郎の藝
にしる、五郎の藝にしる著しくブル的色彩を帯びては居る處に
洗練されつくされた魅力のある所以なのです。——これである
から駈け出しの俳優や、所謂プロ劇を弄ぶ處の新劇團などの追
従を許されないのです。

私のこゝに指示するブル的色彩と云ふのはこれ等の人々の上
演脚本のイデオロギーを云ふのではありません。その舞臺に醜
し出される處の、全躰の感じがさうなのです。難かしく云へば

表現意識がこれなのです。五郎君自身では「僕の真劇は、いつ
もこの取材を中流以下若しくはドン底生活の描寫につとめてゐ
る」——と常に云つて居る。だがこれを以つてプロ劇だとは私
達には思へません。五郎劇のテーマは、飽迄も非戰闘的なので
す。階級觀念を強調することを止めて先づ協調態度を示してゐ
ます。其處に五郎劇に、流る、ユーモアにさへ、氣品がある譯
だと思ひます。

五郎劇の観客層の大半は、中流以上で占めてゐます。家庭園
樂趣味が、巧みに舞臺と觀覽席とを融和させてゐます。——是
れなども古い歌舞伎劇場情調の延長と云へば、云へます。——
實際昔の歌舞伎は、俳優と觀客との氣持は、快く飽和してゐた
と思ひます。この具象的な現はれとして、今日も残る四五の顔
見世狂言の或物から認め得るでせう。

鴈治郎の衰へざる容色の、——このいつく／＼までも若いこと
を謳歌することに於てさへ、満足する幾多の觀客のあることは
何んと床しくも懐かしい戯場道德であることよ。

鴈治郎の芝居を見る人、五郎劇に一夕の悟樂を求めた人々に
は、角芽立つた議論は禁物です。大野暮です。異端者です。偏
狹人です。だから斯うも云へます『鴈治郎の生命』を知らぬほ

どの人ならば、五郎の藝の好さも判りつこないと論断して置きます。

× エナルジーは常に燃焼してゐます。鷹治郎の持つ魅力も、五郎の溢る、覇氣も、これからです。これに酬はるゝ、人氣も、寧ろ安價にすぎはしまひかと思ひます。

× 兎に角大阪劇壇の將來に、これだけの二人が出て来るでせうか、さう思ふと私が、いつも云ふ國寶扱ひにも異議はありません。何處やらの標語めきますが「先づ大阪劇壇!!」——而して鷹治郎と五郎とを有する強味を、我々は誰憚からずに、東京劇壇へも、誇稱して可いと思ひます。

× 他人の短所を咎め、缺點を暴露したがる島國民的な根性を捨て、飽迄も、日本の個有藝術を擁護する意味に於ても、歌舞伎を興隆ならしめ、再び得難い名優を聲援することは、相當教養ある人々の、一つの義務ではないでせうか——。

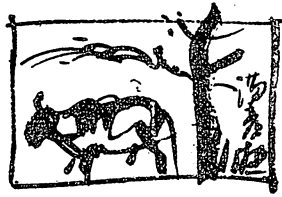
× これで私の云はんとする處を、要約いたしますと、偉大な過去」の保持であり、追懷慕に出發したものに、歌舞伎年中行事の一つたる顔見世と、この王座にある二優の藝術を十二分に賞翫しようではないかと云ふことなのです。

× この意味に於て、私は、タツタ一度で可いから鷹治郎と五郎とを一座させたいと希ふ者です。——ナニこれは喜劇ちや餘りに喜劇的な提案だと仰つしやらずに下さい。私はこの二優の顔合せの舞臺に於て、この演出効果は勿論興行價値に於ても百パーセントのあるものを持つてゐます。

× これには先づ劇界の因襲打破をせねばならぬと云ふ條件もありますが、今日では既に門閥とか、階級とか、立脚地とかに、こだわつてゐる時代ではないと思ひます。

× 素人上り見たような映畫俳優が、立派に既成俳優?——妙な名稱ですが——の中に立ち交つて相當の舞臺價値も、認めさせ興行的にも成功せしめてゐるではありませんか、鷹治郎と五郎の顔合せ、豈に痴人の夢として葬つて終ひたくはないのです。私には私の確固たる信念の下に斯くは主張いたします。

× 要するに顔見世月に際して、この二優をめぐる、取りとめもない感想を、思ひ出すまゝに、直卒に書きつらねて見ました。顔見世のなほ生きてある昔かな
顔見世や役者繪などを合せ見て
京の雪浪花は霜の顔見世や



顔見世への期待と興味

竹内勝太郎

濃尾へかけて三四日忙しい旅をして歸つて見ると松竹宣傳部から二十一日までに原稿を書けと云ふ嚴命が下つて居る。カレンダーの指す数字は100である。下手の考へ休むに似たり矣。ぶつ、けにペンを原稿紙へ滑走させる。果して離陸が出来るかどうか？

何を措いても先づ私は顔見世と云ふことそれ自體を愛するものだ。だから毎年顔見世の立派であること、出し物のよいこと座組の勝れてゐることを期待する。だから「本極り」と云ふもの、發表を不安と希望とをごつちやにして待ちかまへる。だから……等々等。

宣傳部から廻つて來た今年の「狂言配役」を私は長く睨んでゐた。座組で魁車のぬけたのは残念だが勘彌の這入つてゐることとで充分以上に理め合せがつくとして、これに中車、梅幸、幸四郎を加へて鴈治郎一座に新進壽三郎があるのと共に一脈清新

の氣風を持ち來たすだらう。出し物は京都では珍らしい中車の「安宅關」を中心として左右に梅幸の「土蜘蛛」幸四郎の「紅葉狩」鴈治郎の「紙治」新進の「お國と五平」を据え、晝夜を通じて見れば大體軍師の采配宜しきを得てゐると思はれる。

偕個々の狂言と配役だが、これは見ないものもあるし、見ても何等印象に残つてゐないものと配役全部が違ふものがある。「春日局」は前者だし、「辰駕」は後者だ。「名和長年」と「お國と五平」は見えてゐない。

「山科閑居」は「伊賀越後頭娘」の政右衛門等と共に鴈治郎の武道具では上作の一つだと思ふ。殊に今度は梅幸がお石、中車が母親でつさ合ふのだから必ず大きな芝居になるに違ひない。「土蜘蛛」となると梅幸十種のうちでも「辰橋」のやうなあえものでなく、「舟辨慶」「茨木」と共に梅幸三名作の一つ、贅言を要せぬ。永久に残さるべきものだ。

「キブス煉固齒磨」



本品を使用すれば幼時より老年に至る迄歯牙を完全に保つ事が出来
 ます何故なれば、キブス煉固齒磨は刷子がとどかぬ微細な間隙へ侵入して常
 に齒を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのであ
 りますから毎日二回必ずキブス煉固齒磨を御用ひ遊ばせ、さすれば氣分は
 爽快になられます。

本品は美しきアルミニウム罐入りで桃色の固煉製であります有名な
 百貨店、薬店及化粧品店に賣つて居ります。

大形 壹個 金七拾錢 大形中味 壹個 金六拾錢 小形壹個 金四拾五錢

ロンドン パリス
 デイ・エンド・ダブリュー
 日本代理店 株式會社
 横山商店
 東區豊後町三番地

「紅葉狩」の團十郎寫しは蓋し幸四郎所作事中壓卷の作、いつ
 もの福助役の維義を勘彌、魁車役の山神を長三郎が受持つてゐ
 るので、次の時代の精銳をすぐつてゐるだけに一層意義が深い
 譯である。

「時雨の炬燵」の最大興味は鴈治郎の治兵衛に對する梅幸のお
 さんである。それが福助若しくは魁車と比較してどんな新解釋
 と新演出を試みるか。相手が常に用意周到な、そして役の性根
 を理解することに鋭い頭を持つ、鍛練し切つた藝の人だけに興
 味は正に百パーセントと云つてい、だらう。
 梅幸の「鶯娘」には先年見た時私は稍不満を感じた記憶があ

る。それは内的に迫つて来る力感の弱い點だつたが、過般の大
 病以來その藝に一層の凄慘美を加へて來てゐる梅幸だからこの
 「鶯娘」は恐らく快心の作になりはしないかと密かに期待して
 ゐる。

「安宅關」は一度見たが少年時代の古い事で殆ど記憶にない。
 然し中車の之れは既に極めつきのもので、手堅い此の人のもの
 のなかでも手堅い舞臺だから絶対に安心してい、筈だ。
 かくて今年の顔見世に對する私の興味は未見の點から「お國
 と五平」及び以上の理由から「安宅關」、「時雨炬燵」、「鶯娘」
 の四つにか、つてゐる。(十一月二十日)

御挨拶に代へ

中村鴈治郎

吉例によりまして年々の顔見世に、かうして相變らずお目見得の出来ますのも偏に皆様の御引立と篤く御禮を申上げます。つきまして私の演し物は是れ又相變らず「山科閑居」と「紙治の炬燵」で御座いました誠におめづらしくも御座いますまいが、私といたしましては、假令何十度上演いたしませうとも、其時々には全く新しい物を演りますのと同じ心持で御座いまして、一生を修業と覺悟いたして居ります。私は、まだくあゝも演りたし、斯うも變へて見たいと苦心をいたしまするやうな次第で、況してや其時々に対手の役々にも俳優が替りまして、皆様の御目先を變へます爲めに又一工夫が必要になるといふわけなので御座います。どうぞぞ悪い處はお叱りくださいまして相變らず御取立の程をくれぐゝも願ひ申上げます

安宅の關に就ての御話し

市川中車

此安宅は近松巢林子作孕筆盤の一節を故榎本虎彦氏が脚色を致しまして初演は東

近松門左衛門原作

安宅關

一幕二場

(おほむ石)

富樫 イカニ客僧、かく露顯の上は我こそ武藏坊辨慶なりと明らかに白状めされ
辨慶 是は聞えぬ關守の間狀かな、辨慶にもあらぬ此の法師がいかで辨慶なりと申し得べきか

富樫 ヤア、しぶとき賈僧が申條、ヨシ白状せずば、此處にて誅すべきか、如何に
辨慶 言語同斷、かゝる所に通り掛つたるが身の不肖、この上イザ尋常に誅せられん

判官主従、いきを切つて駈來り、番
観念の眼を閉ぢ、泰然たる折からに
所の庭に突ツ立つて

此の文句の内、東の花道より義經外八人の山伏出て來り關門の内に入りて

義經 東大寺勸進の山伏、奉加につかずば附かぬまで、何とがあつて此の先達を召捕へ法體の身も憚らず、粗忽の繩をかけられし

京歌舞伎座に於て明治三十七年十一月十三日初日一番目假名手本忠臣蔵の通し中ま
く安宅關大切日高川一座は尾上梅幸、市村羽左衛門、片岡市藏、尾上松助、澤村
訥升今の宗十郎、尾上菊五郎、中村吉右衛門、私は未だ八百藏の時、武藏坊辨慶
を勤めました。此役は中々骨の折れる役でして後ろ手に繩にかゝり義經をふまえて
長ぜりふを聲張りあけていゝ。大流きに泣くといふ役拵へは昔よりあります。畫面を
其儘に坊主あたまへ兜巾を付ました形最初本の出来ました時は竹本丈けでとの咄
しもありませんが一寸竹本丈けでは面白くない箇所もありますので長唄を掛合に私
しに致した次第、幕外の六法のは入りはいろ／＼と工夫を致し十八番の辨慶の飛六
法に就かぬやう私し獨得の六法を考へまして御覽に入りました處、殊の外皆様方の
御意に叶ひ、數度相演じ至る所、旅行興行などに再三演じましたが、誠に縁喜の能
い狂言にて一度も不入の事のない私に取りましては芽出度狂言に、御座ります、初
めての時の役割は○義經を梅幸○富樫を羽左衛門○常陸坊を松助○八天王は菊五郎
吉右衛門、八十助今の三津五郎、菊五郎、菊三郎蟹十郎、宗三郎、團兵衛○番卒を
團八○童を菊太郎現今の振付花柳壽輔○柿大郎家久丸○辨慶を八百藏私しが初めて
の演出に御座います。

友之丞再演に際して

守田 勘 彌

好劇家各位が、すでに御承知の如く、谷崎先生の「お國と五平」は、その頃流行？

ぞ、本地山本より、鎌倉殿へ訴へ出て、僻
事と相成らば、悔ひて返らぬ富樫どの後日
の罪科笑止なり、イデ先達の繩とかん
唄へ立より給へば、番のもの一度にば
らりと取廻す

竹、南無三寶と辨慶、人目のひまに判
官をねめつけ／＼心の中は早瀬川
唄へもまるゝ波の川柳、それむりし
て居たりける、富樫介聲をかけ

富樫 ヤア、しれたる山伏かな、この一卷は
あの法師が勸進帳と名づけて、天も響けと
讀み上げしき、奪ひ取つて披見すれば、是
見よ、勸進の趣意は、一字一點もなき往來
の巻もの、夫つらくおもん見れば、など
と、誠らしき文句をならべ、佛を偽り人を
欺く不敵の曲者、彼こそ西塔の武藏坊辨慶
鎌倉どの、御説によつて、搦め捕つたる富
樫介がよも僻事ではあるまい

義經 ムウ、あの先達を辨慶なりとは、色黒
く香高く、似たるを以ての故ならんか、安
宅の關には鳥亂の判所、それとも又正しき
證據あつての事なるか
富樫 ハ、ハ、ハ、天下の沙汰の批判の控あ
るべきか、辨慶が繪圖、これを見よ

した變態敵討物の中でも、菊地先生の「恩讐の彼方に」と共に、實に奴璧ともいふべき不朽の傑作であります。私が初めて上演しましたのは、大正十一年の七月、帝國劇場で、その時はお國を河村菊江氏、五平を阪東壽三郎氏、友之丞に私が扮しましたので、今回、南座の顔見世初出演に際して、再度上演するやうにとのお勧めでそこで五平は持役で豊田屋さんが勤め、お國を高砂屋さんが勤めて下さるといふので私として大に興味をもつて演ずる次第であります。

昔から澤山ある歌舞伎劇の敵討物では、すでに芝居通語として「敵役」といふ詞が存するほど、敵の人物は紋切型の悪人でありましたが、一度この變態敵討——その詞がすでに變態ですが——物が現はれると、敵役必ずしもお約束の悪人型でなくそこには或る場合には同情も起り、また或る時は憐愍も催すといふ、一面には運命や境遇を考へさせ、他面には人間本性を痛感させるやうなものが、舞臺の上に、脚光を浴びて、正面から露出されたのであります。

かくして「お國と五平」といふ悲劇？一幕も、在來の歌舞伎芝居の型を破つて、全然新しい劇として迎へられたのであります。今單に各個の役の上からいひますと、五平の直情的なるに對して、友之丞は執着そのものともいふべき性格、唯お國に至つては、全く運命の絲に操られる、人間本能の己み難き愛憎と、時代習俗の武士道的道徳觀と、更に加へて將來の生存に就ての利己的考慮と、甚だ複雑錯綜した性格の持主で、それだけお國の役が一番難しく、また一番好い役でもあると思はれます。

初演の折には、谷崎先生御自身で演出監督をなすつて下さつたので、今度も阪地にお住居なされる先生から、御差圖なり御注意なりがあること、思つて居りますがそれとも初演の通りに演じるとのことです。ありますれば、無論當時のまゝで演ずるつ

竹へ一刺さつと押ひらき

手文庫の中より繪圖を取り出し
面う付まなざし手足の作り、丈は六尺二寸
の眼尻のくぼるまで寸分違はぬ確かな證據
を逃れがたき確かな證據であらふがなア

義經 辨慶が人相繪圖のあるからは、判官の
繪圖も 候はん、事の起りは判官一人、繪
圖に合せて頼めとリアノ先達を助けられよ
富樫 イヤその繪圖までも 候はず、さう云
ふ御邊が判官どのよ

唄へからめよ取れよとひしめけは
唄へスワ我君の一大事と各太刀に手
をかけ

竹へ辨慶ツツと寄つて判官をガバと踏
倒し腰のつがひをどうくと四ツ五
ツ踏みつけはつたとにらみ

此のうち、番卒は山伏を取巻く
山伏皆々強情をする

辨慶 文句の通りよろしくあつて
辨慶 ヤア、此處な強力上りの糟山伏、年が
さ達を差置いて、最前よりの差出づら、憎
くしと思ひしに、義經の繪圖に合せ、似た
るものを搦めよとは、おのれが似たらば何
とする、この法師も辨慶ほどにあらずとも

もりで居ります。

唯多少杞憂して居りますのは、友之丞が動かすにいふ臺詞が自己告白の連続とでもいふべき、自分で自分を説明しすぎてゐるかの感を、観客に抱かせはしまいか、そして私共は衆臺で百パーセントの緊張気分を演じてゐても、或は幾分かでも観客に飽きを來たさせはしまいか、此點が私の最も責任を感じ至難を感じ、尠からぬ苦心の存する處であります。

殊に劇は一場一景、登場人物は三人きり、勢ひ對話的説明的とならざるを得ないのであります。

初演當時去る方から、最後の五平に一太刀斬られてから、もう少し動いて、もう少し芝居をしたら、どうだつたらうとお説も承りましたが、すでに人間愛慾の本相まで剔出して、しかも奇異なる三角關係の表現となり、背景は「ひろびろとした淋しい秋の那須野が原の夕暮」であり、殊に肩先を斬られて倒れるその刹那の一句がお園にも、五平にも、友之丞にも、また観客にも最も緊要な焦點をズブリと刺すので、どうもドタバタは出来ない譯なのであります。

初演の時の久米正雄先生の御批評に、「あれだけ長い單調な告白を、まああれだけにやれるものは外になからう云々」とありましたが、これは私としては全く思ひもよやれるものは外になからう云々」とありましたが、これは私としては全く思ひもよらない過當な御讚辭であつて、今日でも猶且恐縮して居るのであります。唯初演と今度の再演とでは、此間八年餘りを経過して居ります、高速度時代の現時の観客各位に對して、果して私の拙き技藝をもつてして、此の名作を演話して、御期待に背かぬ程度の御満足と與へられるであらうかどうかと、衷心大に憂慮して考る次第であります。

イザと云はゞ五人十人掛つても搦めらるゝ者ならねど、おのれは元來孤兒の、父も無く母もなく、一人の兄弟子に見放され、さまよふ身體がふびんさに、行末安穩ならせんと、鬼神と云はれし人にさへ、指も差されぬ此の法師が、雜人ばらに組みしかれ、むぎと繩には掛つたり、某が掛らねば、おのれに掛るこの繩目

竹へたとへ千筋萬筋でも手足の繩は解

名に掛つたる一筋は子々孫々にまで解けざるぞ、諸國諸道を勧進し大伽藍再建の大願を忘れたるか、エ、罷り立て強力め

唄へのう同行の客僧たち、きやつ引立て歸つてたべ

法師の身には主もなく、君も無し、法が數が即ち主君、その教えを表はしたる兜巾袴掛は取も直さず、法師の主君

竹へ主君を踏んだる天罰未來の報ひの恐ろしや

ヤヨ強力め、全くおのれを戴くに非ず、此の兜巾袴掛の主君を戴く、許させ給へ、御免あれ

唄へよそに事よせ泣きければ

以上は唯今考へて居りますことで、その地へ参りました上で、また谷崎先生から何等かの御差圖あり御注意なりがありますれば、多少演出が變るかも知れませぬ。それにつけても前述の久米先生の評言の中に、「遠慮なくいへば、もつとかう浮世繪風に、グロテスクな味を加へた芝居として見たいくらるに僕は感じる」といふ一節がありましたが、その當時はグロテスクなど、いふ詞は、難しい専門語のやうに考へて居りましたが、現今ではエロチックといふ詞と共に、モダン語の中でも大立物として威力を現はしてゐますが、「お國と五平」の一篇を、エログロ扱ひにしたら……など、獨りで微苦笑を洩らしました。(五、一一、二一)

『名和長年』に就いて

松本幸四郎

名和長年公は日本歴史の上に著名なものでありながら、是まで公の事蹟を仕組んだ劇はあまり見受けられませんでした、ところが先年計らず、江見水蔭、右田寅彦、幸田露伴諸先生の作が殆んど同時に發表されました。そして私は其何んもの長年公の役を演じ、此元弘の忠臣とは因縁淺からざるものを感じて居ります。

此度顔見世に演ぜられる幸田先生の「名和長年」は先年大倉喜八郎氏の八十の賀の祝に最初の上演を見たもので、その折は畏くも各宮殿下妃殿下の台覽を辱ふし

竹若木を結ばぬ富樫の介、御痛はしき、肝にしみ、何にも助け通さんとしばし心を碎きしが、番所を飛下り辨慶がいましめの繩引ほどき

この文句の通りよろしくあつて富樫 おこがましき山伏ども、察する所おのれらは、此頃切つたる山伏の恨みを報ぜん

其のために、判官又は辨慶に人相似るを選び出し、左の眼尻のほくろまで、其儘に寫しなし、ソリヤ辨慶よと擲めさせ、鎌倉へ引かれし上、此の家直に不覺を興へ腹を癒やさんとこの計略よな、扱も憎き不敵の山伏共、五十日も百日も關所につないで浮目をみせ、泣面させんと思へども、誠の判官、辨慶を詮議の妨げなすおのれら、止め置いて何かせん、通れ、通りおろう

唄へ通れとこそは呼はつたれ、人々胸の暗の夜に月の出でたる如くなり、判官氣色に顯はしたまわす

義經 イカニ富樫殿、誠の判官、辨慶ならねば、助けられても解しからず、先達に繩をかけたる粗忽の振舞、山伏道の作法にて、きつと申分ある筋なれど、俗人に對し問答も無益、通して後悔めさるゝな

其他正服正装の各大臣、文武官、貴顯が觀覽席に滿ちて居りましたが、劇の進行に従ひ堯心の苦衷を演ずる處に至りますと、觀覽席の八方から涙の鼻を吸る音が聞えました。堯心と對座してゐる長年役の私は此音を耳にしますと思はず身顫ひを感じ身心の引緊るを覺えました、それから私は、長年が自分であるか、自分が長年であるか我を忘れてその劇の中に這入つて行きました。烏滯がましい申條ですが、恐らく當時の長年公の心中は斯くも在つたであらうと思はる、まで、その劇中の人物になりおほせたといふ氣が致しました。

震災の翌々年でしたかと思ひます。山陰地方巡業の折、鳥取米子に参りましたとき名和神社を参拜致しました、幣帛料に姓名を記し納めますと社務所の方が、あなたは今日の日を御存じで御参拜ですかとお尋ねです、確か八月の十五日と思ひます、その日は長年公の忌日に當るといふのです、而も祥月なのです、これは全くの偶然でした、私はこの偶然にも此忠臣との因縁の不思議を感じてをります。

名和神社への道すがら土地の人が今日は隱岐の島が珍らしく晴れて見えると、私の幸運を喜んで呉れました。自動車を降りて遙かに隱岐の島に目禮し、大阪港の帝の御舟の着した處、その他の舊蹟を巡り當時を追想致しました。

今度の上演は五度目になります、最初帝劇の時から相手役堯心は今故人とナリし尾上松助さんが勤めました、人柄といひ年配といひ此人獨自の藝風を以て當時非常に評判になつたものです。

昨年二月大阪中座に於て此劇の上演を勧められました時、松助さん亡き後、誰が此の堯心を勤めるだらうといふ疑問を抱きましたが、帝劇及び大倉家とも交渉を重

(下欄へつゞく)

源内 予、雜言つがずと早く通れ
眼へ心は先に急げども足元はゆるく
と行過ぎ給へば下部の雜式

(上欄よりつゞく)

ねた上、幸ひに守田勲彌さんを得ることが出来ました。同君も最初は辭退をされ謙遜の詞もありましたが遂に承諾され、その意氣と熱とを以て松助さんとは又違つた味の堯心を見せて好評を博しました。今度も勲彌さんが勤めてくれます。

尙此劇を最初帝劇上演の時は、興行日數實に二ヶ月に涉つての入を見せました、是は私どもに取つては珍らしいことで、明治初年六十何日打續けしといふやうな事は承つては居りますが、其後恐らく四十日と續いたことは無い様です。

是もこの劇に就ての憶出の(一)です



『名和長年』の力

入江 來 布

藝術至上主義からいふと、脚本は一切役者を豫想したり、役者を目標としたりして書いては不純だといふことになる。そして役者は、自分の藝を光らすといふことよりも、たゞ脚本の命するまゝに従順に演じさへすればよいといふことになる。純理の上からはどうしてもさうである。

併し、實際の舞臺を観る目からいふと、役者の持ち味、特長個性をどうしても閉却してしまふ譯には行かない。役者の持ち味特長、個性を舞臺の上に活用するのと、せぬのとは効果の上非常に違ひのあることは今更言ふまでもあるまい。そこで、それだけの役者が、どんな點に持ち味を現はし、どんな點に特長、個性を發揮するかといふことは、單に從來の得意藝、十八番もの、お家藝といふ風な類型的のものだけで類推しては却つて本質に觸れない事がある。「脚本は役者に囚はれてはいけな

い」といふ藝術至上主義もこの點に於て意義があるのである。思ひがけない意外の配役によつて意外の持ち味、特長を發見することがある。だから、役者はいつも同一型の配役、即ち今迄はまり役だと言はれてゐた型のものばかりに凝り固まらずに時に異色のある配役を買つて出て、隠れた持味を探究し、試練する勇氣がなければならぬ。同時に脚本も、脚本絶對至上主義に偏せず、役者の持ち味を活用する用意を含んで作られるといふことも必ずしも直ちにそれが脚本の低下でもなければ作者の屈辱でもないであつて、本質のいゝものは依然として藝術價値の高いことは言ふまでもないことである。

○
脚本の本質を低下せずに、而も役者の持ち味を活用する脚本

はなか／＼むつかしい。同時に、役者の方でも、自分のために當てはめたものでない白紙の脚本から自己を發見して活演するのはなかく／＼むつかしい。その代りこの兩者がうまく渾融一致したら、それこそ申分のない絶好の芝居が舞臺の上に現はれるのである。

「名和長年」の芝居がそれである。

「名和長年」これは幸四郎丈にとつても勘彌丈にとつても、實に、脚本と役者とが期せずして渾融合致した至上の芝居であると言つてよい。

幸四郎丈がさながらにして長年になり切つてゐる自然さに於て、丈の従來のどの十八番ものよりも最もよく持ち味がまともに發揮されてゐる。幸四郎丈にこれほどの適り役は殆どあるまいと斷言して過言でないほどの適り役である。

また勘彌丈に於ても、これほどに熱演の効果を齎すところの適り役は他に多くはあるまいと思はる、活演である。長年は極めて自然に、謂はゞ幸四郎の生地のままにその人が現はれ、堯心はその努力、熱演、息づまるやうな演出のうちに勘彌丈のもち味がにじみ出てゐる。

さうして不思議なことはこの脚本は特に役者への迎合を本位として書かれたものでなく、即ち脚本至上主義の創作である。

幸四郎丈は兎も角、勘彌丈にとつては、この脚本が出たとき、その堯心役が後に自分に廻つて來やうとは自分も思はず、人も豫期しなかつたところである。長年役にしても、直ちにそれが幸四郎丈に限るとまでは誰れしも思はなかつたであらう。それが、脚本と、兩優と、三方三者一寸の際もなく渾然と融和合致したことはまことに稀有な事例として見てもよい程である。

勘彌丈は、他のいろ／＼の新作役への努力よりも、この堯心役には異常な努力を要し、また疲勞も特に痛感すると自ら語つた事であつたが、さもあらうと首肯される。

さう謂へば、一見自然に樂々と持ち味を出してゐるかのやうに見える幸四郎丈も長年役に於ては或は勘進帳の辨慶以上の汗を絞り、苦心を拂つてゐることであらうと想像されるのである。そこにこの芝居の力があり面白さがある。見物も緊張せざるを得ぬのである。

京の顔見世に、この芝居の出るのは愉快である。

霜布く京の極月にこの芝居を觀るのは愉快である。



名和長年

(おほむ石)

少將 勿論此の御使一大事なれば任重くして力足らずと辭退致すもさる事ながら今や事謀りて人少し其方が參らずば予が行かん、なれども其方その間は必ず帝を守護し奉りて屹度御安泰におはさせ申すか

堯心 ム、それはいよいよ身に餘りて、とても御受けがなりませぬ

少將 然らば御使を承はるか

堯心 それも大役

少將 君をあづかり申すか

堯心 サア

少將 名和へまゐるか

堯心 サア

少將 サア、ア、ツ、腑甲斐なき身の口惜しや

堯心 ム、ア、ツ、腑甲斐なき身の口惜しや身は下總の成田が一族弓矢取りには生れたれど、生れついでに虚弱ゆえひそかに名利

のおもひを省きて世に競はねば才なきを愛ひず人と争はねば力なきを恥ぢず、只一筋におのが世をすむしとのみ過ぎ來りしが齡六十に近うして、今日の此場に臨みてはじめて吾と吾力の足らざることと思ひししたり、ア、情ない名和へ行きてもおぼつかなく、君の御守護もおぼつかない

少將 え、才力ばかり事をなさんや、堯心ともある者が無益の纒事聞苦しい、平生の讀書今何の功ぞ、躊躇疑惑は大事の禁物、勅諭なるぞ名和へ參れツ

罵り勵ます

罵り勵ます

罵り勵ます

罵り勵ます

罵り勵ます

罵り勵ます

罵り勵ます

罵り勵ます

少將 オ、領承萬足、はやいてまぬれ
 堯心 ハツ
 立上り三四歩早く歩みて又連く
 心猶風託のこなしあつて

名和の又太郎といふ男、弟泰長は君の御
 味方、嫡子義高は六波羅方、心の底は測ら
 れぬが
 小聲横向きになつて
 腹切る形をなし

五臟六腑をたゞきつけ、悪鬼となつても引
 ずり來やうまでム、
 決心、急に走らんとして前の水
 子が捨て行きし水樽に躓き、バ
 タリと倒れ少將と顔合はす

義行 イヤ奇怪なる一言かな、長年殿の人物
 は汝等風情の知ることならず
 宗家 なまじいに、我は顔して忠義立ては仕
 給はねど二方殿に何をか愧んや
 義直 風の日に竹はしなへどその直きを失は
 ず
 實行 御心懸は一族皆知る、頤をたゞひて

皆々 痛い目見るな
 たしなめる

堯心 これを聞いて喜びながら
 波羅の下知につけて京上りさせ、千劍破の
 寄手に向はせあらずや
 義行 ム、



堯心 サア、心に忠義を存じ玉はど、君は孤
 島に潜ませ玉ひて陪臣は天下に威を振ふ、
 日月暗き今日世に何とて安逸を食らるゝや
 義行 ハ、それは
 堯心 サア、それでも二方二郎に愧ぢられぬ
 義行 ハ、

堯心 村上源氏の流れの末か、具平親王の後
 裔か

義行 ム、
 義泰 エ、口賢きえせ論義
 宗家 かしましい、だまりをらう
 義直 無童の奴、だまらずば
 義氏 その頼柄を
 皆々 打割呉れらう
 ト一同吃つとなる
 堯心 いや、必死の勢ひ

堯心 理に味きものは心あらし、打たば打て
 よかし、サア名和の一族、たゞし又太郎殿
 には何とおぼす
 詰よする
 長年、なほ毅然として黙す

何とおぼす
 又のざりよる
 長年猶黙然一族ざわつく
 制して猶黙然
 長年 シツ
 堯心 何とおぼす
 又のざり進む、長年猶黙す
 家柄と云ひ器量と云ひ、天晴頼もしげの大

丈夫、心が二途に互ればこそ、口に一言もなきか

考へ込む、急に弱くなりてそれがし如きはたゞこれ匹夫、有る甲斐もなき身なれども、つくゞ世の様を見、帝

成田堯心



の御上を思へば浮世の涙のあらしに漂はせ給ひて心になき隠岐の島、朝の雲には御ん愁ひたなびき、夜の雨には御ん涙あらそひて、口惜しく日夜をすごさせ給ふに、随ふものは皆力なく、窮める魚は洩れたる池を守れども、衆の鳥は榮ゆる柯に集ま

ると古き詩の通り世の有様、人皆時に媚びるを知つて誰一人心をよせ奉るものなき情なき

涙になる
斯く申す堯心は、鶴を縛る力もなければ帝の御んために身を抛つても存ずるに、二方二郎の血をひきし名和殿ともあらう者が知らず顔とは恨みてござる

歎息のこなし
長年ハツと悟りたる思入あつて
長年 ム、此又太郎に何とせよとて然様のことを云はるゝぞ、御身一個の御存念ならば長年左右は返答せず、御身は抑もいづれより來られしぞ、願ひと云はれしは一時の方便、察するところ隠岐の君の堯心ヤ

驚く。
長年 サ、隠岐の君の御ために長年を説かるゝか
堯心 ヤ
長年 御身一存のことにはあらじ、至急といひ、大事といはれし言葉の後先、語氣、眼の色、身の舉動もたゞ事ならず、いづく

何人より遣はれしぞ、たい明かに申され候
堯心 アツ驚き入つたる御明察
厭くだけ

まことは
云ひかけて、又更に云ひ出さんとする事の重大なるにじたく慄え出し

おどくしながら
思切つて、實と手を伸ばして、前の小刀を取り、事破れなば腹切らんす意
六條少將忠顯卿の旨をうけ、勅諭承はつて、成田小三郎堯心、これへは参り向つたり、隠岐の帝の勅諭なるぞ
長年及一同 ハアツ

仰天して席を避けて平伏する
又又以下謹んでうけたまはれ
威儀をつくるい
合方キツバリとなる
帝隠岐の島をば脱けいでさせ玉ひ海陸の御難儀、逆臣の虎口漸く脱れさせ玉ひて、伯

書の大坂へ御着船あり、勿體なけれども勢ひ盛まり、御運通りぬ、かねて名和悪四郎泰長より兄又太郎長年のことを召聞されおり、長年の人となりは深く知る又太郎は必ず頼まれなん、ともかく深く頼みおぼす、御ん迎へにまゐれとの勅諭なるぞ

長年 ハ、アツ

深き考へに洗む

一族は眼を張り固唾を飲むのむ

齋心 猶萬々一頼まれまゐらすこと叶はずば取りまゐらせて鎌倉への勳功にもせよ、隠岐の判官が手にはかゝらじの御意なり

涙滂沱と顔ひ聲になりて云ひ終り

サア、名和の又太郎長年何と承はる

長年 小刀を引抜き切先を吾腹へ擬す

長年 少し退り、袖かき合せ涙聲

長年 かねて一日の君の、かほどの思召深き勅定を蒙りながら弓筋取る身のいかで仔細を申すべき、たとひ首の血を虚空にちらし骨を荒野に横へ候て、千度、百度死に代り候とも本望とこそ存じ候へ、などか嬉しからず、と存じ候はんや、御心易くおぼしめされ候へ、又太郎長年生きて

は神國の民となりぬ、死しては忠義の鬼とならんまて

齋心 長年殿にはしかと領承か

長年 勅命のおもむき、長年謹んで領承仕る

長年 六條少將忠顯卿には初めて見参仕る

それがしこそ名和又太郎長年御使により御迎ひに参つたり、よしなに執奏願ひ奉る

少將 あら嬉しや、名和の又太郎、よくぞ御使の旨領承せられしな、玉土にあらざるところもなければども長汀曲浦皆御敵となり

若秋の風にも御心を置かせ給ふ折柄、早速の御迎へに参られたる大丈夫の心、忠義の魂、君におかせられても御感定めし深く

長年 ハツ畏れ入つたるお言葉にて候シテ帝

には 少將 勿體なくもいぶせき小舟に潮の烟りを

ふせぐばかりの苦影深々滑ませ給ひ、人目を忍び在します

長年 ハ、アツ

へしばしあきていたりける、治兵衛とつくと心を定め

ト、これにて五左衛門引出し残らず明けて改め恟りして思入れあつて百五十兩、引出しへ入れ

名和長年

善四郎



治兵衛 コレ異殿、此五十兩は女房おさんの衣類諸道具のかわり、不足には有らふが是を持つてござれ



風俗劇とも見るべき

「春日局」

吉川 觀方

例年顔見世には、一番目に東西俳優顔合せの、而してその衣裳に背景に大が、りな新作物が撰ばれ、それはいつも一種の大規模な風俗劇の観がある。即ち一昨々年は大森痴雪氏作の「東山物語」で江戸初期時代の貴族僧院生活と島原の廓風俗、一昨

年は松居松翁氏作「繪師尾形光琳」で例の都東山の衣裳競べを中心として上方江戸の町家風俗、昨年は大森痴雪氏作の「春日局」で四條の河原風俗を、そして本年は又中井泰考氏新作の「春日局」が上演せられることに決つた。

春日局は、明智光秀の臣齋藤利三の女で、稻葉正成に嫁し、後かの三代將軍家光の乳媪として、世に知られし賢女である。

今度の「春日局」は、局が一家の山科幽棲時代より、次いでそれに對して後年局が大奥に於ける華やかな生活の一面を見せようといふ、初めは落魄の武家が都はなれた住居、後は嚴かな大奥の儀禮を中心に、榮え行く江戸將軍一家をはじめ、諸國

より馳せ参じた大小名に入り亂れて、御殿女中の美しくも華やかなる生活のうちに、萬世に稱へらるべき烈女が業蹟の一端を描き出さうとしたものである。

此劇の筋の、事件の中心となるべき和子姫は、徳川二代將軍秀忠の女で、慶長十二年十月江戸城に生れ、元和六年六月十四歳の時入内して女御となり、後、後水尾天皇の皇后として、又東福門院とも號せられた御方である。今もその御裝束として、浴衣靈鑑寺に十二單が完全に寶存せられてゐるが、……異説もあるが、兎に角近代女子風俗研究には唯一の貴重資料である。

即ち、第二幕目に書かれてゐる問題の和子姫の裝束は、大體この靈鑑寺に傳へられてゐる什物により、尙他の二三の作例をも考證照按し、特にその後ろに垂らし着する裳の繪は、かの梅戸在貞畫の手をわづらはし、總ての仕立等一さいは大垣龍之助氏に依頼して漸く新調せられたもので、此の装束によつて始め

て見るこの出来得る、先づ正確なる近代貴族女子正装の風姿である。

尤も、此の俗にいふ十二單は、東京の方では歌右衛門や梅幸などが、己に十數年前に舞臺に着用したことがあるが、多くはその色目文様仕立等もたゞ舞臺づらよく美しく立派に工夫せられ、又數年前當地の風俗研究會で、圖案家尾崎秀峰氏の考證意匠により新調し公開せられたことがあるが、これは大體古い繪巻物などにより、而して或る部分は古法に従ひ、或る部分は近代又現代の諸式に依るなど、それ／＼各時代の形式を參酌折衷して摸造せられたものであるらしい。

又、將軍秀忠は冬の直衣に、出衣、黄の單、龍膽丸の縹色の指貫に紅の下袴、大御所家康は薄き香色の雲立浦の小直衣に白の遠菱綾の單に、白の龍膽丸の指貫、白の下袴、將軍子息竹千代國千代は半尻姿といふ何れも今度が始めての珍らしい風俗である。

直衣の下に着ける衣は、私の藏する四領の外にはあまりに見ることの出来ないもので、その着けたは祕傳といはれてゐる小直衣も、珍らしい装束の一つであるが、嵯峨大覺寺には上皇の御料が傳へられ、當地の茂山千五郎氏、東京博物館等にも藏せられてゐるが、今度のは、家藏の鷹司家傳來と傳へらるゝ



おのゝり
福助

ものをその儘摸造した。又龍膽丸は久我家の門流であつて、これも家藏の久我家所用の指貫によつて新調した。

半尻といふのは、童直衣と共に貴族少年の衣服であつて、その遺存せるもの又極めて稀であるが、此度は指貫も共に家藏の大谷家所用のものによつた。

尚ほ諸大名は、長直垂、單の狩衣、大紋、長素襖、長袴等で、長直垂の外はさして珍らしい姿でもないが、これらが數十人も居らば舞臺面は、又一種の奇觀を呈するであらうと思ふ。

最後に、主役の春日局その他女房たちの多くは、美しくて雅な袴姿を撰むこととした。

芝居では、史劇等で女房の袴姿は常のことではあるが、今度は、袴をば緋大腰袴の下に着込み、巾廣の腰紐を右手にかけて立居するさまは、又奇異の風俗として見られるであらうと思ふ。(寫眞は直衣出衣姿と、近代の十二單(唐衣、裳、五衣)姿とである)。

(昭和五年十一月廿六日記)

中井泰孝作

春日局

全二幕四景

(おほむ石)

お福 夫の心を知らぬ、山家暮しが飽きたかとは餘りお情ない御言葉で御座ります、今更夫に別れ子等を殘して、三十路に餘る身を以て御殿奉公、好き好んで致したくは御座りません、仰せあるまでもなくその場できつぱりとお斷りする詮もよう存じては居りましたが(間)只一と筋に家名再興にけげな心を込めるあの三人の和子達のいちらしさを思ひ浮べ、若し私が御殿へ上り、仕合せよく御奉公をなし遂げなば、聽ては三人が出世の端緒にもならうかと、また二つには三代の天下をしるしめす若君を守立てまつる大役を勤めおゝせて流石は稻葉佐渡が妻、内藏助が娘ぞと譽められたさに、その場で即座にお斷り申すも、遂女心の淺はかから、何となく惜しい様に思はれて、言

葉を濁して返答を延にん致しまして御座ります(間)またしても御心に逆らひ、御申譯も御座りませぬ、どうぞ御許し遊ばして下さりませ

佐渡 いや私こそ一途に腹立て、聲荒らげた粗忽を許してくりやれ、思へば女親として子等の爲めに、さう思案されるは道理過ぎる程尤もな次第ではある、が然し常に私が云ふ通り、人は常に正しくありたい、いや正しくあらねばならぬ、此の一事こそ眞の人間の生くべき道ぢや、その道を全ふせんには淺ましい俗塵に染まぬ天に昇るか、野に降るより外はない筈、徒らに武門の榮華の塵にかくれて淺ましくも恐ろしい世の姿と身は武士であればこそ見なくばなるまい和子達の爲には俗塵に染まぬ野に育つこそ

やがては身を安泰に置かしめる唯一の道ぢや、さればお身もよく、此處を得んあつて庄家宅へも時を移さず斷りの返答されるがよい

お福 はい………

二人沈黙

此の時垣根の外に内記走つて来て何かにつまづいて倒れる、泣き出す

千熊と七之丞走つて抱き起す
此時佐渡も思はず庭に降り立つ

千熊 此れ何故泣くのぢや、強い、お身は武士ではなかつたか、武士ではなかつたか武士は決して泣くものではない、今は里にあつて樵夫山かつも同様なれど、やがてはお父様の偉いお名を繼ぐ偉い武士になるお身ではないか、偉い武士が泣いては里の子等に笑はれるぞや

内記 私は泣かぬ、武士だから涙は流れても泣かぬ、泣かぬ、お兄様、私は泣きませぬ

千熊 偉い、武士は決して泣かぬものぢや
此の時下手に里の子顔を出す

里の子 和子様遊ぼう、下の堀へ行つて蟹を

捕るのぢや、早ふ來なされ、皆がそこで待つて居るのぢや

七之丞 忌ぢや、もうお主と遊ぶのは忌ぢや
早う行け、早う行け

里の子 ふん和子様が忌なら、私も和子様と遊ぶのは忌ぢや、今云ふた事忘れまいぞや
と走つて去る

七之丞 なにッ

と追はふとする、千熊とめて

千熊 これ七之丞、何處へ行く

七之丞 憎くい三太めぢや

千熊 あれは里の子ぢや、お前は武士ではないか、武士の弱い者いぢめは一番卑怯ぢや

それより折角誘ひに來たに、なぜお身は遊ばないのぢや

七之丞 あの三太は悪い子ぢや、悪い事ばかりするから皆にのけ者にされて居るのぢや

千熊 それ故お身はあの三太と遊ばぬのか
七之丞 そうぢや

千熊 同じ里の子なれば知らぬ事、武士の子であるお身までが同じ様に悪者の三太をのけ者にするのはよくない事ぢや、普だんお母様が教へて下さる言葉の中に、人を憎む

前に先づ慰めよとあるではないか、悪者を悪者として捨て置けばどこまでも悪者ぢやなせお身は三太を退け者にする隙に、三太の悪い事を諷めてはやらぬのだ、人は悪者を憎んでばかりはならぬものぢや、先づその悪い心を直してやる親切が無ければならぬものぢや、さ、それでは三人でまた劍術のお稽古を初めよう

と三人陸續まじく連れ立つて奥へ去る

後に佐渡は腕拭ねいて立つ、お福は凝と佐渡の後姿を見守つてゐる

聴て佐渡はつか／＼と元の座に就き

佐渡 あゝは私今にして、子等に教へられた今千熊の云つた言葉は子供の言葉とは云ひながら正に人間の眞の心を語る大きな言葉ぢや、人の罪を憎んで、その罪を拭ひやる詮を知らなかつたのぢや、只々その憎しみの爲めに世を呪ふの餘り、己れ一人の考へのみを信じて此の山家住居、お身を初めあたら和子達までも野山にその骨を晒さそう

としたのぢや、よし假に私の思慮が今の世に眞とするも、人の思ひ時の事情は月日と共に移り行く、今日の世は決して明日の世にあらず、況して今年の心を以て十年後の心を計り知らりようや、今の世に淺ましく果敢なしと見る武門武士の姿も、やがて和子達の世には如何に美しく清らかなの世に變り行く事のなしとは限らぬものを、あゝ今にして初めて己れの愚かきに氣が附き申した改めて私はお身が此度の宮任へ許し申す

丹後 母上、如何遊ばしましたか………

お福 ……(身動きもしない)

丹後 母上、如何なさりましたか………

暫らくして、お福は持つてゐた手紙を心憂きものゝ如く、投げ

お福 これを見や(と、沈思に入る)

丹後拾ひ上げて見て

丹後 (吃驚して)エ、ツツ、こりや御離縁状

七之丞、内訌、飛鳥共に驚く
丹後 何とての御離縁状、得心参りませぬ(凝と考へる)母上御心配御無用にご参ります。

谷崎潤一郎作

お國と五平

一幕

(おほむ石)

友之丞 …… 夫の仇討に出たそなたが、道中

てわづらうと云ふは重ねん、の不運ぢやがあの二ヶ月といふもの、窓の下で尺八を吹きながら、拙者はいつもそう思うた…不運とはいふが、今頃はさぞ心のうちで、お身たち二人はその不運を喜んで居よう、ひとつとしたら仇討のことも忘れて居よう、病か直ればいつまでもさうしては居られまいが、どうせ世の中は假の宿ぢや、暫しにもせよ楽しい時がありさへすれば、仕合せてあらうが、…なうお身たち、それに違ひないではないか、拙者は何もお身たちに恥を掻かせよと云ふのではない、羨ましいと思ふばかりぢや

お國、青ざめた顔色で五平と目を見合せる

五平 これ、何を證據にそのやうなことを

友之丞 お身たちは今、拙者を殺さうといふのではないか、死んで行く者に隠し立てをしたとて何になるのぢや、四年の間戀しい人の跡をつけて居た拙者が、どうしてそれ程のことを知らずに居やう、成る程國を出た時はあつた主従であつたらうが、お身たち二人が何時からともなく馴染めたのは、よう知つてゐる、拙者はあの熊谷の越前屋でお身達の隣の部屋で泊つてゐたのぢや
お國 え、つ、てはあの晩そなたは…
友之丞 お、隣の部屋で話聲は残らず聞いた…ぢやがお國どの、何も案ずるには及ばぬ、拙者が此處で殺されてしまへば、それを知つてゐる者は廣い世の中にはお身たち二人、敵を討つて歸れば、きつと首尾よ

く嗜れて夫婦になれるであらう、馬鹿を見るのはこの友之丞、たゞ一人ぢや

五平 …… それを知つて居られては、今更、お前様にも面目ない、何も始めからさう云ふ腹があつたといふわけではない、ふとした事から不義とは知りつゝ奥方さま…割りない仲になつてしまふた…池田様、どうぞ、赦して下さい…

友之丞 はて、拙者は許すも許さぬもない、たゞそれにつけても、恨めしいのは世の中のぢや、拙者は人妻に思ひをよせて身を誤つたに、それは同じ事をしてそれが忠義ぢやと人に言はれる、そこには不義をしながらも世を渡つて行く道があるが、拙者にはその道がない、そちのやうに、侍の道を辨へて、日頃の心がけが正しい人は善人ぢや拙者のやうに根性のひねくれた、意氣地のない者は悪人ぢやと、世間の人は一概に言ふ、考へて見れば悪人といふ者は、つく／＼損な役廻りぢや、いかにも拙者は悪人なればこそ人を殺した、ぢやがその報ひはうけてゐるのに、そちは拙者を殺さうとするばかりか、それを立身の緒にする

五平 池田様、赦して下さい、私が悪うござい
ました、私ちやとてお前様と同じ悪人ちや
友之丞 そんなら、そちは拙者の命はゆるし
てくれるか

五平 さあ、それは……

友之丞 そちも、お國どのも、拙者に向ける
刃はない筈ちや、そちこそ主人の奥方と不
義をした、めぐり合せがよかつたら、拙者
がお國殿を我が物にして、そちを伊織殿の
敵と呼んで見せるのちやが……

お國 なる友之丞……、さう云やるのも尤も
ちやが、……そなた、それほど私を思ふて
居るなら、どうぞ私のためちや程に死んで
くりやれ

友之丞 いゝや嫌ちや、……世に捨てられあ
るに甲斐ない日は送つてゐるもの、淺ま
しい事にはそれでも、矢張り命は惜しい、
無理に殺すなら殺されもせうが、拙者はど
うしても死ぬのは嫌ちや

お國 したがそなた、そのやうにして生きて
ゐたとて何になると思ふてちや、私とそな
たが夫婦の約束をしたといふのは、あれ
は遠い昔のこと今では私は、そなたには愛

憎がつきた、そなたが五平を殺したからと
て私からだは思ひのまゝになりはせぬぞ
へ、五平も死ぬなら私も一緒ちや

友之丞 (淋じき微笑)あは……拙者がなんて
お身たちを殺さう、殺したうとて拙者には
その腕がないのちや、なうさうてはないか

お國 そんなら、そなた思ひ切りよう死んで
くれぬか、どうぞ私を助けると思ふて
五平 池田様、すまぬ事ちやが丁見して下さ
れ、お前様の身になつたらわれくがさぞ
憎うござらうが……

友之丞 はて、何もお身たちは拙者を殺さず
ともよいではないか、戀路の邪覺をしよう
とは云はぬの……

お國 ても敵を討たねば國へ歸れぬ、私たち
は暗れて夫婦になりたいのちや
友之丞 お國どの、拙者を少しでも不憫と思
ふたらよう考へて見てはくれぬか、お互に
討つの討たうのとむづかしい事を云ふのは
やめて、今までのことはきれいに忘れて了
はうではないか、拙者は虚無僧になり果て
て一管の笛を傾りに、何處へなと流れて行
から、お身たちももう國へは歸らずに一生

旅をついけるなら、知らぬ土地に落ちついで
家を持つたと、どうなりとして、夫婦樂
しく浮世をよそに暮すがよい、拙者は武士
の道は知らぬが、さうしてこそ、お互に情
を知ると云ふものちや

お國 いやちや、私は國へ歸りたいのちや、
國へ歸つて五平を立派な侍にしてやりた
いのちや、……お、そればかりか國には
可愛い子供もある

友之丞 そなたにそふまで云はれても、拙者
はどうしても死にたうない、死ぬのは嫌ち
や、……この友之丞がたつた一つの頼みち
や程に、命だけは助けて給はれ、これ、お
國殿、どうか拙者を不憫と思ふて
お國、五平にそらと眼配せして
身を構へ、短刀の柄に手をかけ

五平 氣の毒ながら、是非に及ばぬ池田様、
覺悟めされい

新興成美團と『明眸禍』の演出

山上貞一

復興といふ文字が使はれた時代がある。再興と囃された時代がある。更に最近には新興といふ文字が活用される。然も、もうその感じも普遍化され、決して尖端的な文字で無くなつてゐる。成美團は秋月、小織の朝日座當時から、即新派劇の直感がある程、斯道では懐しい又強い傳統と響力を持つ劇團名である。その成美團が新興の名を冠して現はれた。

即ち再興とか復興とかいつた部分的な稱呼でなく、破壊の後の創造といつた感を多分に含有した新興の文字を頭に頂いて明治、大正と傳統し來つた新派劇成美團が道頓堀に進出したのは昭和五年十一月だ。

歌舞伎劇、喜劇と三大別し得る新派劇が、劍劇とか新劇といつた新しい類別に挾撃されて、いつか存在を失はふとした事さえある。どうかして新派劇の命脈を立派に繼續して主張したいとは誰しも考へてゐるが、新派劇と一口に言つて失ふと、歌舞伎劇と同じ古典的な感が多分にする。歌舞伎劇が歌舞伎十八

番とか新古演劇十種とかを想起さす如く、新派劇もすぐに「不如歸」「金色夜叉」の如き所謂新派劇全盛時代の當狂言を想像する。そしてそれでないと新派劇でないやうに思ふ觀客すらある。よく劇通に言はれる處の「新派劇の古典化」だ。

新派三頭目である伊井、喜多村、河合の人達を指して斯くいふ事は肯けるが、花柳梅島の所謂新進新派の人々を指しても斯く宿命つけやうとし、更に新派畑出身でない人々が劇團を組織して新派劇と名乗つて振出した時にすら、その感を持つ人があるとすれば、それは甚だ遺憾である。

再興、復興の文字を排撃して、新興の文字を冠した成美團は正に新しく創造された昭和の新派劇であつて、所謂新劇と何ら差別されるべきものではない。

そこで、私か此度會社の命に依つて演出を承つた態度もはつきりと認識して頂ける事と思ふ。

創造され新築されたものに、素人とか五人とかの別は無い筈

で、既成の人々が持つ経験から来る實力すら變型される時だ。私の持つ白紙がともによりよい色に染まり行くなら、そこに何の相違もないはずだと思ふ。

最初昭和六年一月興行から、演出をお手傳ひするやうに命ぜられたので落着いてゐると、好成績に依つて十二月打越しとなり、私も一月早めて十二月興行の角座からとの事で、しかも「明眸禍」六幕九場を擔當する事となつて、無経験者全く眼を白黒させてゐる。

原作は菊池寛氏、脚色は川村花菱氏、その本に何のそつがあらう。演出者無用で、水の流るゝ如く興味百パーセント、興行價值百パーセントで、全く手も足も出すよすがもない。たゞ私は全體の破綻なきやう監督して行けばよい位のことだが、本読み、讀合せ、立稽古、衣裳しらべ、効果音調の掛合、總稽古舞臺稽古と全く犬の如くに追はれてゐる。幸ひ一座の男女優諸君が、私は非常に好意を寄せて下さつてゐることは感謝してゐる處だ。

「演出者の抱負——山上貞一は語る」……その日まで借すに時日を持つして頂きたい。

岡本綺堂先生はこの門末の門出に際して、「新派が衰微したのは新聞物ばかり繰返したせるのであるやうに思はれます。新聞物を頼るといふことは結局獨立性を失ふことになりまますやはり新聞を離れた新作物に依らなければいけ

ますまい。なにしろ現在の新派劇をどうにかするのは難儀です。すから、大いに努力しなければなりません。」と金言を與えられた。この董教に報ゆる日の近からん事を契つて斯道に猛進する。

——立稽古の夜・角座にて——

京都市木屋町松原下ル

明文堂印刷所

電下四八五番

嵐 巖 笑 逝 久

中村鷹治郎と共に一代にて名をなした關西梨園の大名題嵐巖笑丈は去十一月十九日午後十時五十分天下茶屋の自宅で永眠した。巖笑は昨年(昭和四年)三月浪花座で我童、

福助、右團次等と一座し、「春日局」の板倉伊賀守と源太勘當場の母延壽の二役をつとめたが、以來所謂老病で自宅で靜養中、同じく十月中座で延若が地震加藤を出した時も

一座する豫定だったがそれも病氣のため起てなかつた

従つて三月の道頓堀が最後の舞臺となつた。

父は内裏奉仕の侍

文久二年十月京

都祇園に生れ本名

は北村保次郎、祖

父は内裏奉仕の侍



だつたが、近衛老公がたま

〳〵祇園に遊び、保次郎の

舞踊を見て、「俳優にしたら

よからう」とすゝめた、こ

れが舞臺生活の動機となり

近衛老公から都若といふ藝

名を貰つて、四條北座の嵐

瑠寬一座に入り「重の井子

別れ」の三吉で初舞臺――

時に明治三年――明治十年



十二月同じく北座で「天一坊」の小姓主税

を勤め巖笑と改名、大阪進出は同優十九歳

の時で、齊入一座で角座出演「檜山」の南

部左衛門を勤めた。明治二十二年一等俳優

にすゝみ、現今に及ぶ、家號小村家、享年

七十歳、その全盛期には鷹治郎と覇を争つ

たなど人氣のあつた人である、當り役は板

額重の井、政岡、松王等。

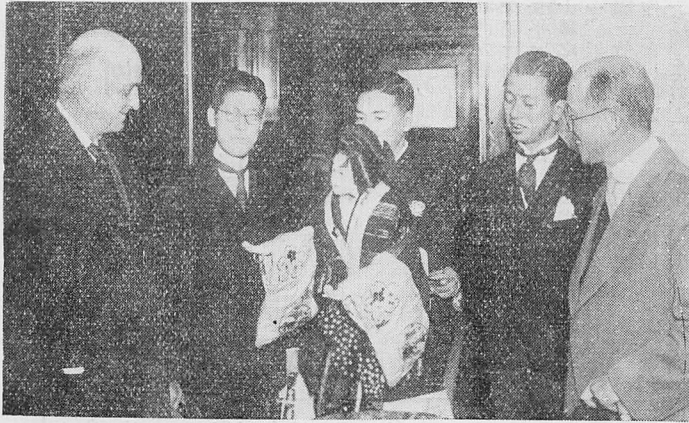
(寫眞は在し日の巖笑と

當り役重の井)

米國新大使フ氏の

一文樂座忠臣藏見物

十一月文樂座の「忠臣藏」は満都の人氣を高め、外人連も「ハラキリ」で有名なのを「忠臣藏」を是非に十三日には加奈の實業視察團五十餘名大舉して見物した。新任米國大使キヤメロンは、招宴會に來た。新米國大使キヤメロンは、約一時間餘もツジトから來阪の井邸の様文座へ馳付けて大序ツジト見入り聴き惚れた。



淡海當り祝ひ

十月中旬より浪花座に出演中だった志賀 酒家淡海一派は十一月十七日に打ちあげたが連日の盛況を祝して、十五日夜打ち出し 後宗右衛門町本みやけで華々しく當り祝ひ を舉げた。

英國經濟使節

トムソン 卿一行文樂見物

さきにカナダの經濟視察團一行を迎へた文樂座はまたや二十日來朝中の英國經濟使節サー、アーネスト・トムソンをはじめヒル書記長、サートーマスマスアレン其他二十餘名の一行が大坂商工會議所の紹介で文樂座。



十二月六日、大阪實業界の名士によつて組織されて居る新士會は來る、六日京顔見世夜の部を観劇すると。

二 劇壇往來

吉例顔見世興行

四條・南座

一日 初日
一日 夜の部五時

【狂言】晝の部第一、中井泰孝作同舞臺監督、吉川觀方衣裳考案「春日局」二幕、第二近松門左衛門作、玩辭樓十二曲の内「碁盤太平記」山科附居、第三、幸田露伴作「名和長年」二幕、第四、河竹默阿彌作新古演劇十種之内、「土蜘蛛」長唄囃子連中、夜之部第一、近松門左衛門原作榎本虎彦脚色「安宅關」竹本連中長唄連中、第二、谷崎潤一郎作、吉川觀方衣裳考案、松田種次舞臺裝置「お國と五平」一幕、第三、新歌舞伎十八番の内「紅葉狩」竹本連中、常磐津連中、長唄連中、第四、玩辭樓十二曲の内「時雨の炬燵」紙屋、第五、雪の巻「鶯娘」長唄連中花の巻「辰鷲」常磐津連中。

【役割】大石内藏之助、六條少將忠顯卿、紙屋治兵衛(鷹治郎)妻お福の方在春日局源頼光、遠藤お國、紀之國屋小春(福助)大

石主税、番卒太郎、戸隠山の山神、吾妻與四郎(長三郎)酒井雅樂頭、次男孫三郎其長渡邊源次綱、侍女望月(吉三郎)郎黨瀧村源之丞、侍女明石、河内彦三郎義真、碓井貞光、駒之助)中老藤浪、仲居お千代、萬屋彦七宗家(成笑)郎黨多賀五郎三郎、幫間叶次郎三郎實行、熊井太郎(扇)侍女白妙、藝者花千代、蛋婦お浪(鷹之助)長男千熊后に稻葉丹後守、太刀持小源太(延太郎)侍女飛鳥、召使おさよ、番卒次郎、侍女岩橋(成太郎)二代將軍秀忠、侍女胡蝶、丁稚三五郎、禿たより(扇雀)角倉與一、青山伯耆守坂田公時、駿河次郎(政治郎)三男乙童丸、女小姓花野(章景)土井大炊頭、弟鬼五郎助高(竹藏)仲居お春、漁師音右衛門(雀)老女お棍の方、幫間勝作、漁師浪六(成三郎)庄屋八左衛門、幫間夢の助、漁師籠七、五貫屋善六(齋五郎)郎黨原田重作、本多上野介千波八郎、伊勢三郎(九剛次)侍新吾、醫者玄伯、江戸屋太兵衛、箱登羅、稻葉佐渡守、信濃坊源盛、若黨五平(壽三郎)母千壽、武藏坊辨慶、粉屋孫右衛門(中車)大御所家康下男岡平、名和長年、富樫之介家直、戸隠山の鬼女、舅五左衛門(幸四郎)板倉伊直守旅僧空念、常陸坊海尊(幸藏)祐筆越の方、侍女田每(梅朝)蛋婦お岩、梅之丞)漁師確右衛門(彌好)幫間梅助(菊四郎)日野三郎義行増、尾十郎(錦四郎)舟子(大七)蛋婦お磯侍女秋野(三四郎)漁師沖藏、卜部季武(梅

助)藝者松千代、備中守義直(右衛門)棋取(鬘斗藏)若黨藤三郎(彌三郎)漁師岩藏、片岡八郎(中三郎)侍女確米(高麗五郎)侍女水瀬、侍女松代(高麗雀)成瀬準人正、六女太郎義氏、番卒藤内、鶯尾三郎、從者八内(純藏)秀忠の御臺所、日野又三郎義恭、龜井六郎、從者運平(志うか)成田小三郎堯心、平井保昌、源判官義經、虛無僧實は池田友之丞、余五將軍惟茂、浪花治郎作(勘彌)妻およし、叡山の僧智藤實は土蜘蛛の精女房おさん、鶯娘、梅幸。

會我廼家五郎一派

中座

一日 初日
每夕五時開幕

【狂言】第一「雨の四辻」二場、第二「越後獅子」二場、第三「彌兵衛の榎」二場、第四「作業服」二場、第五「老樹の若葉」一場。

【配役】材木會社、重役木村一雄、地主新田嘉兵衛、鐵工吉田兼吉、關東煮屋の主人瀬川吉兵衛(五郎)酒屋の手代仙吉、茶店亭主與八、按摩丸井彌兵衛、盗人ドラ猫の太八、散髪屋谷崎久吉(蝶六)伯母汐見武子、芳井妻喜代子、女給露子(大磯)旅行展りの紳士井上保、一雄の兄木村久太郎、土方岸

本卯吉、某會社重役芳井文雄、植木屋戸田佐七(小次郎)人力車夫脚氣磯兵衛、神官禰原正直、酒屋上田又兵衛(一朝)車夫山田吾八、一雄の父木村久右衛門、鍋焼屋段取りの清兵衛、人足小頭、五樂)久太郎妻兼子、嘉兵衛の息嘉一郎、芳井下女お岸(林蝶)嘉兵衛娘絹子、吉兵衛妻お金(秀蝶)警官神田某、瀬川の舊友大橋宗七(時雄)車夫おからの利八、木村家下男丈助、棟梁本田光三、電線工夫(時右衛門)一雄の妻敏子、長屋の娘ラヂオのおく(時和)兼吉の妻お新、仲居お仲(桃蝶)傘賣る女おみつ、百姓留吉、若い會社員(五郎丸)吳服屋川口友七、大工幸吉、あんこ仲仕九兵衛(笑將)木村家下女お今、百姓兵吉、按摩仁平、商家の手代(勢蝶)棟梁正木鐵之、設計技師井口某(蝶太郎)車夫念佛の與吉、車力丑松、易者臼井心齋、有福な御隠居(宗蝶)

新興成美園

角座
一日 初日
晝正午二回開演
夜五時半

【狂言】第一、夕刊大阪新聞所載、中井泰孝作並演出「女曲藝師」三幕三場、装置森堂次郎、第二、鈴木彦次郎作、門脇陽一郎演

出「まだら足袋」二場、装置、大塚克三、第三、菊池寛原作、川村花菱脚色、山上貞一演出、婦女界所載「明眸禍」六幕九場繁岡鑿一装置。

【配役】道具方治三郎、劇作家笹沼省三(都築)曲馬師民さん、珠子の伯父芳三郎(元安)サーカス團長林景爽、舞臺監督小谷(進藤)舞臺係龜さん、出前持の金藏(山中)馬使ひ岩井哲也。中學生佐成(高田)出方鐵公辯護士(鈴木)出方吉ちゃん、珠子の父傳三郎 茂義能(誦負師前川喜策、老僧(梅田)隣りの婆さん、近江泰助(木下)師匠おたつ、香川珠子(東、踊り子みどり、新劇座女優吉野)踊り子敬子、新劇座女優(米田)團長妻おたつ、珠子の母、米津)踊り子守江、新劇座女優(雄鳥)女曲馬師菊江、妹節子(浪花)曲藝師かづ枝、新劇座女優宮部京子(六條)源吉女房おとし、省三の妻みさ子(石河)法學士濱田宗平、恭助息恭一忠七弟良吉、(山田)俣夫源吉、原田忠七(伊志井)

關西大歌舞伎

神戸・松竹劇場
一日 初日
毎日午後二時半開幕

【狂言】通し狂言「假名手本忠臣藏」大序よ

り討入まで、淨瑠璃岡鬼太郎作、常磐津文字兵衛作曲、藤間政彌振附「小袖餅」常磐津連中、第四段目の次に御覽に入候。

【役割】桃井若狹介安近、石堂右馬之丞、早野勘平、清水一角(我童)足利左兵衛督直義、長者の家人徳丸、一文字屋お才、矢間重太郎(霞仙)大星力彌(ひとし)磯川十良左衛門(八百藏)須田五郎(我久之助)雜式、勝田新左、子守お久(我久三郎)ばつさり奴、三村次郎、長者の腰元壽々々(魁童)雜式、大鷲文吾高師安(奥山)雜式、大星瀬平、百姓與市兵衛(延郎)雜式、竹森喜多八、肝煎源六(右田三郎)高武藏守師直、不破數右衛門、郎(橋三郎)高武藏守師直、不破數右衛門、寺岡平右衛門(市藏)鹽冶判官高貞、圓の長者元家人福王、女房おかる後に遊女おかる小林平八郎(魁専)原郷右衛門、圓の長者、斧定九郎(徳三郎)加古川本藏片山源太、めつぼう彌八(卯之助)深川彌次郎、長者の腰元巨満(芦鷹)ばつさり奴、小寺幸右衛門(松壽)顔世御前(蓮女)ばつさり奴、狸の角兵衛、奥山孫七(美鷹)ばつさり奴、川瀬忠太夫、種ヶ島六兵衛(市昇)鷲坂伴内、遠の森助右衛門(麗正)斧九太夫、母おかや、矢鳥喜兵衛(大吉)大星由良之助良金(延若)

編輯後記

京顔見世の初日が出ると本年の仕事の片づいた様
に思ふのは、強ち僕一人ぢやありませんまい、芝居に
關係して居るものゝ、ひとしく感じる所でありま
せう。

その顔見世もいよゝ初日が近づきました、所で
顔見世特輯と銘打つた本誌も、豫定以上、計劃以上
の充實をもつて、讀者諸士に見見得る事が出来ま

×

「顔見世に寄せる」の藤井、富田、竹内三氏の顔見
世讚美は本號中必讀のもの——雁治郎中車、梅幸、
幸四郎、勘彌諸優の思ひ出や、演出上の苦心談は、

舞臺より觀客に呼びかけるもつとも親しい言葉

また東京諸優の久々入浴に際し、河竹、遠藤兩氏の
御寄稿は道頓堀最近の異彩——「炬燵」「土蜘蛛」「紅
葉狩」等の不朽の名篇に就いて東西劇文壇諸家の研
究、考證沿革解説は、何れも専門的立場からの御研
討で、断然本號の呼物となりました。また西尾氏に
お願ひして、山科閑居に因み大石の遺跡を探ねてい
たゞきました、芝居と遺跡の面白い對比を御覽下
さい。

×

一年中殆んど毎月の様に本誌のために御寄稿下さ
つた東西劇文壇の諸先生及び先輩諸士に本年最終の
編輯後記に當り改めて厚く御禮申上げます。

住 田 冬 和

昭和五年十二月一日發行

月刊『道頓堀』第五十一輯

◆ 誌代は前金でお拂ひを願
ひます。

◆ 郵券代用は一割増にて御
註文を願ひます。
◆ 御相談の上廣告掲載の需
めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編
輯部廣告係へ御申越し下さい

本號に限り

特價 金參拾五錢 (郵費五錢)

昭和五年十一月三十日印刷
昭和五年十二月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

編輯者 鳥 江 鏡 也
發行所 松竹土地建物興業株式會社

印刷者 北 島 竹 次 郎
大阪市東區區部橋南之町二丁目

印刷所 桃谷印刷株式會社
大阪市東區區部橋南之町二丁目

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹土地建物興業株式會社
發行所 道頓堀編輯部

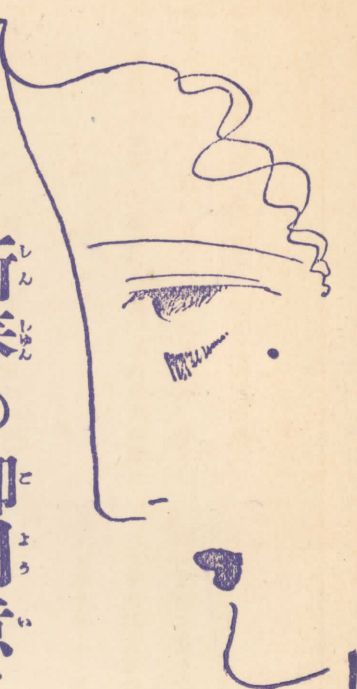
電話(一六四〇番)
(一六六五番)

—に度たく仕御の晩歳

新春の御用意に

十二月の三越

徐ろに閉ざされゆく一九三〇年の幕——
 いち早く冬の御用品を以つて埋めました当店
 では、更に御歳暮の御贈答品を初め、クリス
 マス用品並びに迎春の御支度品まで、各種豊
 富に取揃へてをります。わけてもお忙がしい
 折の御買物には至極御便利で御座います。何
 卒御用命の程偏に御願ひ申上げます。



三越の商品の券
 歳末年始の御贈答に御利用を!



三越

◇ 阪 大 ◇



昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和五年十一月三十日印刷
昭和五年十二月一日發行

は粧化おのれ晴

粉白ブラク

輝く化粧品
優れた氣品

美しい晴れの
お姿を一段こ
上品に引立て
るクラブ白粉

白色・肌色
水色・桃色

アレスに一番よい

クラブ美身クリーム



第五年十二月號

本號に限り

一部 金參拾五錢 (郵 壹錢五厘 稅)

53, 5. 25, 1, 000